

---

# バカとテストと武想伝

ザキオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと武想伝

### 【Nコード】

N7180V

### 【作者名】

ザキオ

### 【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次制作です。

読んだら感想をくれると嬉しいです。

コラボは感想に一言くれれば許可します。こちらからコラボの願いをするときもあります。その時は許可してください。幸いです。

それではバカな少年とその仲間が繰り出す物語をどうぞお楽しみく

ださ

感想はユーザー制限なしにしているのでお気軽にどうぞ

## 第一問（前書き）

今から始まりますがちゃんとできるか不安です

## 第一問

その日俺は悪夢を見た気がした

「なんだこの教室・・・」と絶望してると

「さすがに酷いね」

と隣にいるバカな仲間が言う。

時間は少しさかのぼる。

「譲崎」

「おはようございます鉄Z・・・西村先生」

「いま鉄人と言おうとしたらう」

「幻聴ですもしくは聞き間違えです」

この先生は西村宗一先生。生徒からは鉄人の愛称(?)と呼ばれている。

「ほら、これだ」

と封筒を渡してくる。

この前の進級テストの結果だ。

この学校は「試験召喚システム」という物を採用している。

それは簡単に言うとテストの点数で武装した召喚獣を呼び出し、クラス間戦争をする、という物だ。

この進級テストはクラス分けテストの意味を含んでおりこの封筒にはどのクラスになるかが書いてある。

『譲崎優也 F』

俺の最低クラスでの最高の騒動が今、ここに始まった。

## 第一問（後書き）

どうぞしょうか感想よろしくお願いします

## 第二問（前書き）

今回はちよい笑あります

## 第二問

優也は封筒をもらい下駄箱に行くと

「あ、優也」

とお世辞にも真面目な顔をしているとはいえない間抜け面をしている友達に会う。

「ああ、明久か」

彼の名前は吉井明久。

「ねえ、優也はどこ？僕はFクラスだけど」

どこというのはクラスを聞いているのだろう。そう思う優也はこう言った。

「当たり前のお前と同じのFクラスだ」

そう答えると

「ん？今のは自分の学力を嘆いたのか僕を馬鹿にしたのかどつちなの！？」

「もちろん両方だ」

「両方！？」

片方にでも割り切ると思ったのが驚く明久。

「俺は人を馬鹿にするにも冗談くらいだから安心しろ」

「そっか。なら良かった。と優也、急がないと遅刻だよ！？」

「何！？行くぞ明久！」

「うん！」

二人は急いだ。自分達のこれから起こる事を知らずに。

「なんだこの教室・・・」「これは酷いね・・・」

以上回想終了。目の前に広がるのは座布団とちゃぶ台の教室。そして「早くしろうじ虫野郎」

目の前にいるゴリラだった。

「何やってんだ知的ゴリ・・・もとい雄二」

「いま知的ゴリラって言おうとしたよなお前？まあいい、先生がこ

ないから教卓に上がってみた。一応代表だしな」

「お前が代表？んな馬鹿なじゃここにいる奴全員この知的ゴリラより頭が悪いってことか！？」

「おい！今はつきりと知的ゴリラって言ったよな！？」

「幻聴もしくは聞き間違え」

「今はつきり聞こえたっての！」

「あー、ちよつと通してくれますか？」

と優也の背後から声がする。振り返ると先生らしき人が立っていた。

「えー私が担任の福原慎です」

名前を黒板に書こうとしてやめる。どうやらチョークもないらしい。

（いったい何なんだこの教室の設備は・・・）

優也がそう思ったところで自己紹介は開始される。

## 第二問（後書き）

どうでしょうかあり得ない教室の設備に絶望する優也。そして次回あれに踏み切る・・・？

### 第三問（前書き）

この前では短いと思い、今回はちょっと長めに書きました。

### 第三問

そんなわけで自己紹介が始まる

「木下秀吉じゃ。よしなに」

と古風な言葉を使うのは優也の友達の人木下秀吉。一見女と間違  
うよくな可愛らしい顔。だが男子の制服を着ている。

「・・・土屋康太」

とそれだけ言って手元のカメラに視線を戻したのは土屋康太。男子  
には畏怖と尊敬を女子からは軽蔑を持ってムツツリー二と呼ばれて  
いる。

「・・・です。趣味は」

と珍しい女子の声

「吉井明久を殴る事です」

だが次の声でぶち壊しになった。この言動的に暴力的なのは島田美  
波。ピコピコと動くポニーテールが特徴的。

「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいね」

『ダーリン!!!!』

男子の大合唱に明久と優也は顔をしかめる。

「譲崎優也だ。よろしく」とだけ言い座る

（おい・・・バカにも程があるぞ・・・）

（実際に呼ばれるとは思わなかったんだよ・・・）

そう言っていると

「すいません、遅れました・・・」

と教室に入ってきたのは確かAクラスの姫路瑞希だった。

「はい、質問です!」

と男子が手を上げる。

「は、はい。なんででしょうか?」

「なんでここにいらっしゃるんですか?」

失礼な言い方かもしれないが皆共通の疑問だった。

「その・・・熱で途中退席してしまつて・・・」

ああ、それなら納得だ、と優也は思う。この振り分けテスト途中退席したら点数には加算されずFクラス行きという残酷な処置である。先生から言つと体調管理も成績のうち、らしい。

優也がそう考えている間、クラスメイトは必死に瑞希へのアピールをしていた。それが恥ずかしいらしく、明久と雄二の間の席に座つた。

「姫路さん」

「姫路」

瑞希に声を掛けようとする明久を雄二が遮る。

「はい。なんですか？えーっと」

「坂本だ坂本雄二。もう体調は大丈夫なのか？」

「あ、それ僕も気になる！」

「よ、吉井君！？」

「明久が不細工ですまん」と驚く瑞希にフォローを入れる雄二だったが全然フォローになつていなかった。

「そ、そんな！目もパツタリしていて顔のラインも細くて綺麗だし・・・」

「そつといえは明久に興味がある奴がいたな」

「（え？誰）それって誰ですか！？」

今度は瑞希の声に遮る明久

「確か久保 利光だつたかな」

久保利光性別

「明久、久保には気を付けろ」

黙って聞いていた優也が明久の肩に手を置き言う。

「そこの人達静かに」

教卓を叩いて静かにしようと思った福原先生だが、

教卓が崩れさった。

「は？」

さすがの優也も動揺を隠せない。かねてからの計画を実行すべく

「明久、雄二ちょっと来てくれ」

と廊下に向かった

「試召戦争をAクラスに仕掛けよう」

と優也は提案する。

「正気か？」

「ああ。どうせ嫌な勉強をするなら設備はいい方がいいし、やはり姫路を元の設備に戻してやりたい」

「ほう、姫路が気になるのか？」

「別に、同じクラスになった事で守護範囲に入っただけだ。それにあいつかなり病弱なんだろう？こんな設備だといづれ何か起こる」

「まあいい、俺もそうしようと思っていたところだ、世の中学力だ

「けが全てじゃないって証明したくてな」  
そしてクラス代表の雄二の自己紹介に。

「俺がFクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。さて、質問だがFクラスはご覧の通りこんな設備だが、Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシートらしいが不満はないか？」

「大ありじゃあッ！！！！」

「皆の意見は最もだ。そこでFクラスはAクラスに試召戦争を仕掛ける！」

端からみたら悪あがき、勝ち目のない戦い。そう思うだろうが雄二には策があった。

### 第三問（後書き）

どうでしたか？物語の核心、雄二が試召戦争を仕掛けるところでした！感想よろしくお願いしますm（――）m

#### 第四問（前書き）

今回は二人目のオリキャラの登場です。影薄いですが・・・それで  
はお楽しみください

## 第四問

『これ以上設備を落とされるのは嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

と一部変な意見もあつたが総合すると反対の様だ。

「俺が勝たせて見せる。優也」

「結局人任せかよ。・・・おい康太、姫路のスカート撮影してるな」

「は、はわっ」

「・・・（ブンブン）」「こいつが寡黙なる精識者だ」  
ムツリーニ

『何い！？』

先ほど言つた康太のあだ名だがあだ名で呼ばれすぎて本名を知らない奴がいれらしい。

「次は・・・おい、虎丸起きろ自己紹介だ」

「・・・龍門寺虎丸・・・眠い」

「とまあいつも眠そうなやつだが指揮能力は高い」

『いつも眠そうって、もう寝てるんだが・・・』

「そういう奴なんだ。次は姫路」

「わ、私ですか？」

「ああ、うちの主力だ、期待している。あとは木下秀吉か」

『ああ、演劇部のホープか』

『たしかAクラスに姉がいなかったか？』

「当然俺とこの知的ゴリラも全力を出す」

「おい優也今知的ゴリラって言つたよな？」

「ああ、失礼坂本ゴリラが全力を出す」

「名字を付けろって意味じゃねえ！」

「そう怒るな話が進まないだろ」

「お前のせいだろうが!？」

「あとは 吉井明久か」

『誰だそいつ』

『そんな奴いたっけ？』

「知らないなら教えてやるこいつは学園初の観察処分者だ！」

#### 第四問（後書き）

どうでしたか？優也のささやかな雄二への罵倒というより雄二に罵倒しかしていませんでしたね。次回はようやくDクラス戦の予定です。それでは

## 第五問（前書き）

今回はやっとDクラス戦！少しは読みごたえがあるかと思えます。  
それではお楽しみください！

## 第五問

觀察処分者とは、一部学習意欲に欠ける者が冠する称号である。特例として教師と同じ物理干渉能力を持った召喚獣で教師の代わりに雑用をこなす事である。召喚獣は見かけによらず力持ちなのでサッカーゴールを持ち上げたり出来る。その代償として召喚獣のダメージがある程度フィードバックするのである。

『それって、バカの代名詞じゃなかったか？』

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ！」

疑問を投げ掛ける生徒に、それに肯定する雄二、そしてそれに怒る明久だった。

『それって、召喚獣が殴られたら本人も痛いんだろ？』

「安心しろいてもいなくても同じような雑魚だ」  
とそこはフォローするべきだが罵倒を含める雄二。

「とにかく、この面子ならAクラスも夢じゃない。とりあえず肩慣らしにDクラスに仕掛ける！」

「じゃ明久、Dクラスへの使者になってもらう無事大役を果たせ！」  
戦争にはっぱをかける優也と、使者に明久を選別する雄二。

「下位勢力の使者って大概酷い目にあうよね？」

「大丈夫だ、俺を信じろ。俺は友人を騙す様な真似はしない」

と明久の肩に手を置き説得する雄二。

「そっか。行ってくるね！」

そして、数分後

「騙されたああ！」

と制服と身体中ボロボロな明久が帰ってくる

「やっぱりな」

「少しは悪びれる！」

「・・・明久、五月蠅い」

「あ、ごめん虎丸」

と起こされた虎丸が言う。

「じゃ屋上に行くか」

と優也が言い、一同は屋上に。

「で明久、開戦は午後からって言ったよな？」

「うん」

「じゃ、先に昼飯か。明久今日くらいはまともな物食つとけよ？」

「失礼なちゃんと用意してあるよ！」

と何かを取り出す明久。

「どうぜ塩と水だろ？」

「今日は砂糖もあるよ！」

「仕方ない、ほら明久一品やる」

「ワシからもじゃ」

「ありがとう優也、秀吉」

お弁当の中から一品ずつ明久に分ける二人。

「良かったら、明日から私がお弁当作って来ましょうか？」

「本当に！？ありがとう、姫路さん！」

「良かったな明久、久々にまともな物が食えるぞ？」

「うん！」

瑞希の提案に喜ぶ明久にそれを称賛する優也だった。

「というか、なんでDクラスなの？」

「Eクラスは正攻法でも勝てるからだ」と称賛ついでに質問する明久。

「でもクラスは上だよ？」

「明久、ここにいる面子を挙げてみる」

「えっと美少女が二人にバカが三人、ムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だ！」

とすつとんきような反論をする雄二。

「まあとりあえずこつちに姫路がいる以上Eクラスは攻める価値がない」

「Dクラスは厳しいの？」

「確実に勝てるとは限らないからな」

と優也の代わりに答える雄二。

「じゃ最初っからAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな派手に行きたいし、打倒Aクラスの策の一つだ」

「でもDクラスにかてなきや意味がないよ？」

「負けるわけないさ。いいか、うちのクラスは最強だ」と言い切る雄二だった。

そしてDクラス戦に。

「吉井、讓崎木下たちが戦闘を開始したわ！」

と美波が駆け寄ってくる。「うーん、何か足りないな。あ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に全部綺麗に」

「まったく、そういう発言するから殴られるんだぞ？」

「とりあえず戦争の様子を見よう」

『来い、この負け犬！』

『てっ、鉄人！？い、嫌だ！補修室は嫌なんだ！』

『黙れ戦死者は戦争が終わるまで特別講義だ！たっぷり指導してる！』

『し、指導！？ち、違うあれは洗脳だ！』

『あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味は勉強で尊敬するのは二宮金次郎といった理想的な生徒に仕上げてやろう!』

『だっ、誰がイヤア・・・』

以上、戦争の様子である。

「島田さん中堅部隊全員に通達。総員退避、と」

「この意気地なし!」

と明久の目に目潰しをする美波。

「目を覚まさないこの馬鹿!」

と言うがその目を潰したのは誰だろうと優也は思う。そこに伝令から前衛部隊が撤退を始めたとの知らせが。

「総員退避よ。吉井問題ないわね?」

「おい!さっきの威勢はどうした!?!」

とつさの変わり身に驚く優也。

「あれは美波お姉さま!」

とツインドリルテールの女子がやってくる。

「美春ッ・・・!」

「逃がしません、試獣召喚!」

「くっ、やるしかないようね!試獣召喚!」

このワードで二人の召喚獣が呼び出される

。

## 第五問（後書き）

どうでしょうか？鉄人の洗脳・・・もとい教育は恐ろしいですね。  
さて次回はDクラス戦終盤まで書けたらなと思います。それでは感想お待ちします！

## 第六問（前書き）

今回はDクラス戦中盤です。それではお楽しみください

## 第六問

二人の召喚獣が出されると点数が表示される。

Dクラス 化学 清水美春 94点

VS

Fクラス 化学 島田美波 53点

おおよそ40点差。そこに真正面から立ち向かう美波。

「ここまですッ！」

と美波の召喚獣を斬り飛ばす美春の召喚獣。そして喉元に剣を突き立てる。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「嫌ッ！補修室は嫌あッ！」

と先程の惨状を思い出す美波。だが美春は美波の手を引き別のところに向かおうとする。

「ふふっお姉さま、今ならベッドが空いてますからね？」

と保健室に向かおうとする美春。

「吉井ッ早くフォローを！このままだとウチは補修室行きより危険な気がするの！！」

と明久に助けを求める美波だが。

「殺します……。美春達の邪魔をする人は全員殺します……。」

「島田さん、君の事は忘れない……。！」

と美春の顔の怖さに見捨てる明久。

「仕方ない、明久に任せる気だったが……。島田、援護する試獣召喚！」

明久が助けるだろうと思っていたがあてが外れた優也が援護の為に召喚する。

「邪魔者は殺しますッ！」

と剣を持ち突進してくる美春の召喚獣。

「武器が二本ある戦い方、じっくりと教えてやる」

そう言う和美春の召喚獣の攻撃を二本の刀、その片方で受け流し、もう片方で脇腹を斬る。

Dクラス 化学 清水美春

41点

Fクラス 化学 讓崎優也

75点

美波との戦闘で消耗したのか一撃で倒れる美春の召喚獣。

「西村先生、この危険人物を早く補修室に……！」

と美春を鉄人に突き出す美波。

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ」

「美春は諦めませんから！このまま無事卒業できるなんて思わない  
でくださいね！」

そう捨て台詞を残し連行される美春。

「島田、大丈夫か？」

「譲崎、助かったわありがとう。で、吉井ッ！！」

優也に礼を言っていると即座に黒いオーラを出す美波。

「ウチを見捨てたわね？」

「記憶にございません」

そして数秒流れ。

「死になさい吉井明久！！試獣召」  
「」

錯乱し始める美波。

「おい、島田明久は味方だぞ！？」

「違うわ！コイツは敵、ウチの最大の敵なの！」

さっき見捨てた為、否定出来ない明久。

「明久、後は頼む」

と島田を連行する優也。

「さあ、皆！秀吉が補給するまでの間戦線を維持するよ！」

『させるな！一気に攻め落とせ！』

ところ変わってFクラス。錯乱した美波と、それを連行してきた優也、そしてクラス代表の雄二がいた。

「落ち着けて島田、誰でもあんな恐怖の様な顔をみたら怯みくraisる！」

「でもアンタは怯まなかったじゃない！」

「まあ俺はあんまりそういう恐怖心はないからな」

「はぁ・・・」

とようやく落ち着く美波。やれやれ、とため息をつく優也だった。また変わって戦線。

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！」

「五十嵐先生側は俺しかいない！援軍頼む！」

「藤堂がやられそうなんだ助けてやってくれ！」

作戦の戦力温存を元に策を練る明久。

「布施先生側は防御に専念して！五十嵐先生側は総合科目の人と交代しながら効率よく勝負を！藤堂君は諦めよう！」

と明久を一応隊長として扱っているのか指示通りに動く。

「何を狙ってるんだ？まさか長期戦にでも持ち込む気か？」

とDクラスの生徒が呟く。そこに

「世界史の田中がFクラスに行くのを見かけた！」

「世界史の田中だ！？アイツらまさか長期戦に持ち込む気か！！」

田中先生は採点に時間が掛かるが長期戦には都合のいいのだ。  
対してDクラスは数学の木内を連れ出した。採点は厳しいが早さは群を抜いているので一気にケリをつける気だろう。そこで

「須川君偽情報を流して欲しい、時間を稼ぐためにね」

「それは構わないがすぐばれるんじゃないか？前線指揮の塚本は声大きい。うまくいってもすぐ混乱を収めてしまっ」

「そこは大丈夫、先生達に流すんだ。他の場所に向かってくれるようにね」

「なるほど、それは効果的だ」

と顎に手をやり答える須川。

「よし、内容は任してくれ、確実に騙して見せよう」

「うんよろしく。さあ僕らは一対一にならないようにコンビネーションを重視して！」

「了解！」

と他のFクラスの生徒が答える。変わってFクラス。一度須川が帰ってくる。

「須川どうした？」

と優也が質問すると

「吉井隊長に偽情報を流せと命令を受けたんだ。」

「偽情報か・・・良し須川内容はこうだ」

と何か思いついた雄二が須川に言う。雄二の顔がニヤニヤしている為、「あ、こいつ明久に何かしようとしてるな」とすぐにわかった優也。

「何て言っただんだ？」

「とりあえず偽情報の標的は数学の船越先生だ」

「ふなッ！ちよつと行つて来る！」

と教室を出ていく優也。

「どんな内容なの？」

と一連の内容を聞いていた美波が雄二に質問する。

「とりあえず明久がどうなるか、だな」

と雄二はそれしか答えなかった。

## 第六問（後書き）

さてどうでしょうか。船越先生で何かを感じ取った優也。はたしてDクラス戦の行方は！？

明日には終われると思います。それでは感想よろしくお願いします

## 第七問（前書き）

今回もDクラス前です。それではお楽しみください

## 第七問

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待て！今数学の船越先生も呼んでいる！」

とDクラスの生徒が会話していると

『ピンポンパンポン、ご連絡します。船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです・・・』

そんな須川の放送が流れた。確かに船越先生が体育館裏に行くが、それは同時に何を意味するか。

船越先生。婚期を逃し、生徒に単位を楯に交際を迫る生徒である。つまりは明久の貞操が大ピンチなのだ。そこに

「明久、大丈夫か！？」

と優也が戻ってきた。

（どうしよう、優也！）

（落ち着け、あと戦争が終わるまで誰にも言うな、あっちにも、そしてこっちにも土気の影響が出る）

その放送を聞いたFクラスの生徒はと言うと

「吉井隊長・・・アンタあ男だよ・・・！」

「まさか、クラスの為にそこまで・・・」

という風に士気がうなぎ登りなのだ。一方Dクラスは

「おい、アイツら本気で勝ちに来ているぞ・・・」

「あんな確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか？」

ということである。この放送が嘘だと分かれば逆戻りである。だから優也は明久に口封じをさせたのである。

（後で対策を考えてやるから今は我慢しろ）

（わ、わかったよ優也）

と言っていると

「明久、優也！後少し持ち堪えろ！」

と遠くから雄二の声が聞こえる。

「ちっ！遠いな・・・明久、やれ・・・そうにないな」

優也が目にしたのはしゃがみ込んで爪をかじっている明久だった。

「仕方ない・・・」

一体、また一体と仲間が戦死する中、優也はなんとか持ち堪えてい

た。

（これ以上は無理か・・・なら）

傍にあった消火器を発射、ある程度経ったのち空の消火器を上のスプリングラーにぶつけ鎮火。そこにFクラスの本隊が到着する。

「譲崎、待たせたな試獣召喚！」

と近藤が召喚する。

「すまん雄二、撤退する」

「ああ、そのゴミ・・・じゃなかった明久も連れて行け」

「ゴミ扱いしたのが気に入らないが了解」

と本隊にまかせ撤退を開始した。

ところ変わってFクラス。撤退した優也、明久それに秀吉、美波がいた。

「優也どうしたのじゃ？明久が凄く険しい顔をしているのじゃが・・・」

「大方船越先生から逃れるよう考えてるのか、須川に復讐でも考えてるんでしょ？」

そう言っていると雄二達かが帰ってくる。

「どうだ？」

「Dクラスは撤退した、続きは放課後だ。皆それまで補給試験を受けてくれ！」

「雄二、校内放送聞こえてた？」

「ああ、バッチリな！」

と笑顔で答える雄二。

「ところで須川君知らない？」

「須川ならもうすぐ戻ってくるんじゃないか？ちなみにあの放送を指示したのは俺だ」

「お前かあああッ！」

と包丁と砂を詰めた靴下を持って雄二に襲い掛かる雄二。

「待て待て！落ち着け！対策なら既に考えてある！」

「本当！？」

いつもの表情に戻る明久。

「ああ、目には目を、だ」

と作戦を言つと雄二はDクラスと決着を着けるべく教室を出ていく。

「さて追い掛けるぞ明久」

「う、うん」

廊下にて

「・・・龍門寺虎丸・・・試獣召喚」

と虎丸が召喚する。点数はFクラスだが戦いながら周りに指示するなど器用にこなしていた。

（おい、明久。Dクラス代表手薄じゃないか？）

と観察しながら明久に言う優也。

（よし、じゃあ行ってくるよ！）

（おい！）

呼び止めるがもう遅い、明久は駆け出して行った。

「向井先生！Fクラス吉井が」

「Dクラス玉野美紀、試獣召喚！」

と途中で遮られてしまった。

「残念だったな船越先生の彼氏くん？」

「だから違っつて！」

「それにいくら防御が手薄でも代表のピンチには近衛部隊が来るに決まってるだろ？ま、お前じゃ近衛部隊がいなくても無理だろうが

な」

「確かに僕じゃ無理かもね・・・だから、姫路さんよろしくね」

平賀の背後には肩を叩いている瑞希が。

「どうしたの姫路さん？Aクラスはこっちを通らなかったはずだけど・・・」

「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞希です。えっとよろしくお願いします」

と可愛らしくお辞儀をする瑞希。

「あ、こちらこそ」

「あの、試獣召喚です！」

Fクラス 現代国語 姫路瑞希 339点

Dクラス 現代国語 平賀源二 129点

「あ、あれ？」

「ごめんなさい!!」

と瑞希の召喚獣が源二の召喚獣を真つ二つにした

## 第七問（後書き）

やっとDクラス戦終わりました。虎丸も活躍しましたね。それでは感想よろしくお願いします

## 第八問（前書き）

さてDクラス戦終結！今回はあの恐怖に立ち向かいます。それでは  
お楽しみください！

## 第八問

（ついにやつちまったか。これでもう後戻りは出来ないな）

と優也は思う。下位クラスの勝利。それは学年中に波紋を呼ぶだろう。クラス代表の雄二と提案者である優也はとんでもないトリガーを引いてしまった。そして思考を止め、現状を確認すると雄二が明久の手をひねり、手に隠していた包丁を落としていたところだった。

「おい、誰かペンチ持ってきてくれ」

「ペンチで何するんだ？持ってないが」

「……生爪」

後ろで明久が震えているのは気のせいではないだろう。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……」

「あ、あのさつきはすいません……」

自分の行為が不意打ちに思えたのか、源二に謝る瑞希。

「いや、謝ることはない。Fクラスを甘く見た俺達が悪いんだ。ルール通りにクラスを明け渡そう。ただ今日はもう遅いから作業は明日でいいか？」

勝って英雄扱いされるのが代表なら負けて貶されるのも代表である

「もちろん明日でいいよね雄二？」

「いや、Dクラスは奪わない。忘れたか？俺達の目標はAクラスだ」

「じゃあなんで最初からAクラスに仕掛けないのさ？」

「少しは自分で考えろ。だからお前は近所の小学生に『バカなお兄ちゃん』って呼ばれるんだ」

「ああ、あの娘か」

と優也の頭にツインテールの少女が思い浮かぶ。

「冗談だったんだが・・・本当に言われた事あるのか？と、とにかくDクラスの設備は奪わない一つだけ条件がある」

「聞かせてもらおうか」

「そんなに大した事じゃない。俺が合図したらこれを動かなくして欲しい」

と雄二が指示したのは

「Bクラスの室外機か」

「ああ、教師に睨まれるかもしれないが悪い取引じゃないだろう？」

「こちらとしては願ってもない提案だがなぜそんな事を？」

「次のBクラス戦の作戦なんだな。さあ、皆！明日は補給試験を行うから今日はゆっくり休んでくれ！」

そして解散していくFクラスの生徒達。

「設備を奪わないのは召喚獣に慣れさせる為と不満によるモチベーションを維持する為か？」

雄二が源二と話している間に考えていた事を言う優也。

「ああ、その通りだ」

そして自分も帰ろうとした優也だったが妙にそわそわした明久を發見した。

（ねえ優也。姫路さんって雄二の事好きなのかな？）

（さあな）

その後明久は妄想、もしくは独り言、もしくは内なる自分との対話をしている明久を放って帰る優也だった。

次の日

「おはよー」

「おはよう吉井」

と近くにいる美波が挨拶を返す。

「おはよう島田さん」

「吉井にいい知らせがあるのよ」

「何？」

「今日の数学の補給試験の監督の先生船越先生だって！」

「どうしよう！？どうしよう優也！？」

「落ち着け！昨日策を教えてやっただろ！」

「そういえばそうだったね！ありがとう優也！」

「まったく」

その後明久は船越先生に近所の独身の人を紹介した。

「よし、昼飯食いに行くか！」

と、背伸びしながら雄二が言う。

「あ、あの皆さん！」

と背中に何かを持っている瑞希が呼び止める。

「昨日の約束のお弁当を作って来ました！」

昨日の屋上で会議をした際に瑞希は皆にお弁当を作って来ると約束したのだ。

「迷惑じゃなかったらどうぞ！」

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああそうだなありがたい」

「ただ飯になるなじゃ、せめて飲み物買ってくるか」

「じゃ俺も行こう。昨日の礼だ」

「じゃウチも行く！二人でも持ちきれないでしょ？」

「助かるな。じゃ先に屋上に行つててくれ」

と屋上派と飲み物買い派に分かれる。

「じゃ、優也。お前が提案したんだ割勘な」

「わかつてるよ。むしろ半分出してくれるのが驚きだ」

「まあな。しかし島田は大変だな」

「そうだな。気の利くライバルがいるとな」

「なっ！？」

と顔を赤くする美波。

「じゃ行くか雄二」

「そうだな」

「ちょ、ちよつと二人してからかわないでよ！」

そして屋上に向かった三人が目にした光景は地に伏した康太と、それに絶句した秀吉と明久だった。そして屋上の隅で寝ている虎丸だった。

「つ、土屋君!？」

そこから起き上がり

「・・・・・・(グッ)」

と足を震えさせながらガッツポーズをする康太。

「おつ、美味しそうだな」

と卵焼きを摘む雄二。

同じく地に伏したのであった。

そして雄二は目で訴える。毒を持ったな、と。それに明久は

(毒じゃなくて姫路さんの実力だよ・・・・)

と同じく目で返事をする。

「あ、足がつつてな・・・・」

と瑞希を気遣って嘘をつく雄二。

「そうだな・・・・ムッツリーニも美味しくて思わずあんなことした

んだよね？」

「……………（コクコク!）」

と優也の無茶ぶりとも取れる質問に頷く康太。

「さあ皆さん、いっぱい食べてくださいね」

と地獄からの手招き。

「あつ島田さん右手のあたりで虫をつぶしちゃったんだよね」

「ええっ早く言つてよ!!じゃ手洗つてくる」

と屋上から出る美波。

（ナイスだ明久）

少しでも被害者を減らそうとした明久の名案。

「あ!あれは何だ!？」

と言う明久につられ瑞希は明久が指差した方を見る。その間に雄二の口に料理を詰め込む。

（お前存外鬼畜だな）

（そう……じゃな）

無事処理成功。

「あれ、もう食べちゃったんですか？」

「うん、雄二がすごく美味しそうに食べていたよ」

「そうですか嬉しいですっ」

「ああ、雄二が気に入ったみたいだからたまに作ってやってくれ」

また皆に作ると言いだす前に雄二のお気に入り登録。

「そついえば駅前に新しい喫茶店が」

とさりげなく話題変更。

「あつ、そついえばデザートもあるんです！」

・・・そう一筋縄では行きそうになかった。

（じゃ俺が行く）

（危ないよ優也！？）

（俺は率先して犠牲にしたよな！）

「ん？あれ？」

「あつ、すいませんスプーンを忘れちゃったみたいですから取ってきますね」

「ああ、すまん」

と屋上を出ていく瑞希。

「さて、食べるか」

「ありがとう優也・・・」

「今回は感謝しよう」

「じゃいただきます・・・ん？別に普通じゃござい！」

「雄二・・・」

「・・・なんだ」

「無理矢理食べさせてゴメン・・・」

「わかってもらえたならいい」

## 第八問（後書き）

どうでしたか？瑞希の料理に撃沈するムツツリーニ、雄ニ、優也。  
次はBクラス戦導入部です。それでは感想よろしくお願いします！

## 第九問（前書き）

さて今回はBクラス戦です。それではお楽しみください！

## 第九問

「そういえば坂本次の目標なんだけど」

と美波が雄二に質問する。その隣では明久が優也にお茶を飲ませていた。

「試召戦争か？」

「うん。相手はBクラスなの？ていうかお腹すいたわね」

「ああ・・・そこに・・・今日の昼飯・・・の予定・・・だった・・・パンがある・・・から食べるといい」

「そう？じゃ遠慮なくもらうわねありがとう譲崎」

「ああ・・・」

「ほら、まだ無茶しちゃダメだよ。お茶飲んで」

「すまん・・・」

「何度も聞くけど目標はAクラスなの？」

と確認する美波。

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てない」

Aクラス代表には瑞希以上の点数があるため、瑞希と1、20人はいないと倒せないだろう。その戦力を単身に向けるほどの余裕はない。

「じゃ最終目的はBクラスに変更ってこと？」

「いや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違うよ？」

「つまりは正面衝突しないような作戦、一騎打ちとかか」

「その通りだ優也。一騎打ちの条件にBクラスを使う」

と考えを当てた優也を賞賛する雄二。

「下位クラスが負けたら設備はどうなるか知ってるよな？」

「設備のランクが一つ下がるんだろ？」

「そう。じゃ上位クラスが負けたら？」

「設備が入れ替・・・」

「くやしいー！」

「ムツッリーニペンチ」

「待て待て」

ペンチを常備している康太を制止する優也。

「優也がいいかけたが設備が入れ替わるんだ。Bクラスに勝ったら設備を入れ替える代わりにAクラスに攻めると交渉する」

「なるほどな。Fクラスの設備になるよりAクラスに負けてCクラス並の設備になる方がマシって事か」

「そういう事だ。」

「それより問題は一騎打ちじゃろう。姫路がいる事は恐らく知ってるじゃろうし警戒して試召戦争にするじゃろうしな」

「それも策がある。安心しろ」

「ふうん」

そればかりは読めなかった優也。

「で、明久。Bクラスに行って宣戦布告してこい」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか。」

「やれやれ、じゃジャンケンで決めないか？」

「ジャンケン？OK乗った」

「ただのジャンケンじゃつまらないから心理戦ありでいい」

「わかった。なら僕はグーを出すよ」

「なら俺はお前がグーを出さなかったらぶち殺す」

「おい、心理戦じゃなくて脅迫じゃねえか!？」

と驚く優也。

「ジャンケン」

「わああああ!」

明久 グー  
雄二 パー

「さあ行つて来い」

「絶対に嫌だ!」

「大丈夫だBクラスは美少年好きが多いらしい」

「それなら大丈夫だね!」

「でもお前不細工だしな・・・」

「失礼な!365度どつから見ても美少年じゃないか!」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「大方一年の365日と間違えたんだろうが45度くらいはあってもいいと思うが・・・」

と、順に雄二、秀吉、優也。

「優也以外嫌いだっ!」

と走り去る明久。

そして放課後。

「・・・言い訳を聞こうか」

なぜか襟と手の部分のワイシャツを残してなくなっている明久が帰ってきた。

「むしろどうしてそうなった・・・?」

「予想通りだ」

「くきいー!殺す!殺しきる!!」

「落ち着け」

と鳩尾を強打する雄二。

「先に帰るぞ。明日は午前中はテストだからな。行くぞ優也」

「ああ・・・ワイシャツの換え用意しろよ明久」

と片方は心配して帰る雄二と優也。そこにあたりをキョロキョロしている瑞希を見つける明久。

（邪魔しちゃ悪いし帰ろう）

「さてBクラス戦だがやる気は充分か？」

『おおー！』

と恒例の雄二のブリーフィング。

「今回は敵を教室に押し込むことが重要になる。だから開戦直後の渡り廊下戦では絶対に負けるわけにはいかない。そこで部隊を2つに分け指揮を姫路と虎丸に任せる」

「がつ、頑張ります！」

「・・・眠い」

「まったく・・・」

虎丸の眠い発言に不安を覚える雄二。

「そうだ秀吉・・・」

「ふむ、了解じゃ」

と秀吉に何かを教える優也。

「野郎共きつちり死んでこい！」

『うおおおー！』

そこにチャームが鳴る。

「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

明久達前衛部隊が渡り廊下に到着。Bクラスからは10人しか来ていない。

召喚獣がまた、一体と倒されていく。

「遅れ・・・ました・・・ごめん・・・なさい」

「来たぞ、姫路瑞希だ！？」

と瑞希の到着に動揺するBクラス。

「姫路さん、来たばかりで悪いけど」

「はっはい。行つて・・・来ます」

そこにBクラスの生徒二人が立ちふさがる。

「・・・試獣召喚！」「」

召喚するが瑞希の召喚獣には金色のアクセサリが。これは金の腕輪。一定以上の点数を取ると特殊能力が付与されるのである。ちなみに瑞希の召喚獣の能力は  
キュボッ

と音を立てて熱線がBクラスの召喚獣を襲う。一人は回避に成功するがもう一人は熱線で燃やし尽くされた。そこをすかさず大剣で残りを切る瑞希。

「姫路瑞希、噂以上に危険よ！」

と戦いをみて瑞希に戦慄するBクラス。

「えっと、頑張ってください！」

「やったるでえー！」

「姫路さんサイコー！」

信者急増中である。

「姫路さんとりあえず下がって」

「あっはい」

と瑞希に指示する明久。

「ではワシらは一旦教室に戻るぞ」

「なんで？」

「Bクラスの代表は・・・あの根本らしい」

根本恭二。彼の評判はカンニング常連、喧嘩に刃物デフォルトと悪いものばかりである。

「なるほど、戻っておいた方が良さそうだね」

「雄二と優也に何かあるとは思えんが念の為に。虎丸、指揮を頼むのじゃ」

「……眠い」

「Bクラスに勝てばよりより環境で寝る事が出来るのじゃから頑張るのじゃ」

「……任せろ」

と指示を開始する虎丸。これがさつき優也に指示された事で効率よく虎丸を動かす為の指示である。

見事成功した秀吉は明久と一緒に教室に戻るが、教室の状況に絶句した。ちゃぶ台は傷つけられ、筆記用具は壊されている。

「これじゃ補給がままならないね」

「地味じゃが点数に影響のぞる嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間がかかるが支障はない」

「ちつ、俺だけでも残るべきだったか」

「お前は俺の護衛だから外すわけにはいかない」

「護衛？」

「協定を結びたいって申し出があつてな。それで教室を空にしていた」

「それ承諾したの？」

「ああ、この協定は俺達にとってかなり都合がいい」

「だが、その都合の良さに何か隠して何かやってるかもな。ここにいるやつだけでいい、一応何か盗まれていないか確認してくれ。明久、秀吉前線に戻るぞいくら虎丸といえど心配だ」

「わかった」

「了解じゃ」

そして前線に

「吉井、讓崎戻ってきたか！」

「須川、何かあつたのか？」

「ああ、かなりまずい事になっている」

「具体的には？」

「島田が人質に取られた」

須川の言葉で優也と明久は呆然とした。

## 第九問（後書き）

どうでしたか？美波が人質に！さてそこでの優也と明久の対応は！  
？では次回もよろしくお願いします！

## 第十問（前書き）

それでは人質にされた美波はどうなるのか！？その結果をお楽しみ  
ください

## 第十問

Bクラスによって人質にされた美波。

「とりあえず状況が見たい。須川、連れていってくれ」

「ああ、こつちだ」

そして最前線に。

「島田、大丈夫か！」

「そこで止まれ！それ以外近づくと召喚獣に止めを刺して補習室送りにするぞ！」

数秒考えた後、明久がこう言った。

「総員とつげ」

突撃用意と言おうとした明久を優也が制する。

「ならここからなら問題ないんだろ、面白い。」

「ゆ、譲崎？」

「試獣召喚！」

優也が召喚を開始したと同時にBクラスの召喚獣が斬られる。この早業のせいか遅れて表示された点数は、415と金色に輝いていた。

「暗記科目で挑んだのが敗因だ」

と言ひ召喚獣を戻す優也。

「島田、大丈夫か？なぜ捕まったんだ？前線メンバーはいるから独立されたのか？」

「・・・吉井が怪我したって偽情報を流されたのよ」

「そうか。無事で良かった。よし明久、今の内に部隊を・・・ってどうした？」

「怪我した僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

「どうやってたらそうなるんだ？」

明久の誤解に飽きる優也だった。

「それでも心配したんだから！譲崎、吉井を説得するのに手伝って！」

「島田さん、本当？」

「悪い？」

「全員偽物を包囲しろ！優也も離れて！」

優也と美波の心の中にカラスの鳴き声がした。

「吉井酷い・・・」

「明久、召喚獣をだせ」

「ん？わかった！試獣召喚！」

と明久が召喚すると。

「とりあえず落ち着け」

と明久の召喚獣にデコピンする優也。

「痛ああ！くそ、優也も偽物だったのか！？」

「もう・・・ダメだこいつ」

「吉井が瑞希のパンツみて鼻血が止まらなくなっただって聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！これ本物だ！」

と手を差出し美波を立たせる明久。

「僕、最初から本物だって気付いてたんだよ？」

次の瞬間明久は美波のハイキックをくらい地に伏した。

「じじはぶじ・・・？」

と回復し、起き上がる明久。

「島田にハイキックされて気絶してたんだ」

「そうだったんだ。でどうなったの」

「今は協定通り休戦中じゃ」

「一応教室に押し込んで終わった。島田を戦死させなかったのは優也のナイスな判断だ」

「その後の明久が酷かったがな」

「ううごめんよ優也」

そこに康太が帰ってくる。

「どうだった？・・・何？Cクラスが試召戦争の準備をしてるだど？」

「漁夫の利を狙う気か？」

「優也もそう思うか。そうだな、Cクラスと協定を結ぶかDクラスをふつけさせれば攻め込む気もなくなるだろ」

「じゃ今から行くか」

と優也が賛同すると

「いや、優也と秀吉は残ってくれ。もしもの事があるかも知れない

し、秀吉には考えている作戦のために顔を割られるとまずい」

「そうか」

「では待つておるのじゃ」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。ここの代表はいるか？」

「Fクラス代表として不可侵条約を結びに来た」

「どうしようかしら、根本君？」

「却下。必要ないだろ？酷いなFクラスの皆さん協定を破るなんて」

と奥に座っているBクラス代表、根本恭二が言った。

「なんで根本君がここに！？」

明久の質問を余所にFクラスの皆を包囲する。

「僕らは協定違反なんか！」

「無駄だ明久！こいつはしらを切るつもりだ！」

「そういうこと」

「Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試獣召喚！」

雄二に勝負を申し込まれる前に須川が割り込む。

「坂本！今の内に逃げてくれ！」

「頼む須川！」

「雄二、いいの！？」

「相手は根本だ！俺達は嵌められたんだ！」

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

「長谷川先生、遠藤先生ついてきてください！」  
というBクラスの生徒の声を背に脱出を開始する。

いくら脱出といっても所詮は体力勝負。普段から病弱な瑞希はすぐに息を切らしてしまった。どうしようか考えている雄二が目にしたのは、背中、つまり追撃しているBクラスの方に振り返った明久だった。

「おい、明久！」

「ここは僕が食い止めるから雄二は姫路さんを！」

「・・・大丈夫なのか明久？」

「当然！僕を誰だと思ってるのさ！」

「観察処分者、か。行くぞ姫路」

「ムツツリーニも逃げて、明日は君が鍵を握るから」

「・・・（コク）」

「じゃウチは残っていいのかしら？」

と名乗り出たのは

「島田さん・・・頼めるかな？」

「お任せあれつと。で、何か作戦はあるの？」

「うん、ちゃんと考えてるんだ」

そこにBクラスに追い詰められる。

「いたぞ！」

「Bクラス！そこで止まれ！長谷川先生に話がある」

「なんですか吉井君？」

「Bクラスが協定違反をしているのはご存知ですか？」

「話を聞く限り協定を破ったのはFクラスですよね？」

とその後くどくどと言われ、考える明久。

「予想通りだけどうするの？アンタの考え、期待してるからね！」

「・・・万策・・・尽きたか」

「「「こいつ馬鹿だぁー!」」」」

一方こちらは雄二達。

「坂本君、大丈夫・・・なんですか?」

「もちろんだ、明久だからな」

「でも・・・」

「確かにあいつは馬鹿だ。だがそれが全てじゃない。あいつも、伊達に観察処分者なんて呼ばれてない・・・ん?」

その時すれ違った人に見知った顔が浮かんだ雄二だった。

「「「試獣召喚!」」」」

とBクラスが召喚する。一方明久と美波は逃亡中である。

「よし、とりあえず島田さんが敵を引き付ける」

「それで?」

「僕が逃げやすくなる」

「まったくお前達は・・・」

と明久の目の前に現れたのは

「優也！？雄二から外出るなって」

「俺があんな知的ゴリラの命令に全部従うか」

「無断なんだね・・・」

「理由に雄二とムツツリー二と姫路とすれ違いになったしなさて、  
遠藤先生」

「また吉井君みたいな事を言いだす気ですか？」

「いえ、遠藤先生はBクラス代表から協定はどんな内容だと聞かされてますか？」

「吉井君と同じ様にみえますが・・・根本君から聞いたのは放課後の試召戦争を一切禁止すると」

「では試召戦争の準備をしていたCクラスはどうでしょうか？これも協定違反です。それに」

優也がちらつかせたのは協定の内容が書いてある文章である。

「ここにはちゃんとBとF間での試召戦争を禁止すると書かれています。つまりは根本に協定の内容をねじ曲げて教えられているんで

すよ！」

何かの推理小説の暴露シーンを思わせる優也の発言に驚く一同。

「長谷川先生は根本に事実の追及を。遠藤先生はフィールドを展開してください」

「わ、わかりました」

「承認します！」

「……試獣召喚！」「……」

と召喚される召喚獣。戦力差4対1だが、優也からは余裕たっぷりの表情を感じ取れた。

なぜなら、優也の召喚獣には先程と同じ461の金色の数字と左腕に金の腕輪があるのだから。

「なんだこの点数！？」

「Aクラスの超級者に匹敵するぞ！？」

「さあ、こいよ」

と優也が挑発する。そこで切り掛かる召喚獣の剣がぶつかると思えた。突如、剣がいつもより小さくなった事でBクラスの召喚獣の剣が空を切る。

そこにいつもより伸ばした剣が召喚獣を一掃する。

「ふう、こんなところか・・・」

「すごいわね譲崎の能力・・・」

「元々単騎殲滅タイプだからな。造作もない」

「じゃ、Fクラスに帰ろうか。皆待ってるよ」

「そうだな」

「ただいまー」

「まったく、無断で行きやがって・・・だが良くやった」

「褒めるな、気持ち悪いから」

「人が素直に言えばなんとこといいやがる！とにかく、これ以上Cクラスは敵だ」

「連戦はキツいな。どっかに狙いを変えさせるなんてどうだ？」

「ああ、そうするつもりだが今日は遅い。決行は明日だ」

「さて、昨日言った作戦を実行する」

「どんな内容だ？」

「ああ、秀吉これを着てもらおう」

と雄二が取り出したのは女子の制服。

「ははっ、お前の考えが読めたわ、はははっ」

と笑いながら言う優也。

「そう。優也が思っている様に秀吉には姉の木下優子を演じてCクラスの注意をAクラスに向けさせる」

「秀吉、言葉を選べよー、優子に何されるか分からないからなー」

とまだ笑いが収まらない優也。

「うむ、では行ってくるのじゃ」

Cクラス前。いま優子（の姿をした秀吉）と明久、雄二と護衛数人。優也は笑うから教室で待機。

「ではよろしく頼む」

「あまり期待はせんでくれよ・・・」

とCクラスの扉まで歩き、扉を開け、こう言った。

「静かにしなさい、この薄汚い豚ども！ー！」

この発言をCクラスから離れて渡り廊下から優也が聞いて吹き出したのはまた別の話である

## 第十問（後書き）

どうでしたか？優也は優子や秀吉と友達なのでこういう事には大笑いします。

では次回はBクラス戦終結！・・・するといいなあ。

では感想よろしくお願いします

## 第十一問（前書き）

今回はBクラス戦終盤です！ちなみに超級者とは優子らAクラスベスト10の事で友達から借りました。

それではお楽しみください！

## 第十一問

「うわぁ」

「流石秀吉だな」

と言っていると

「な、なによアンタ!？」

「話し掛けないで豚臭いわ!」

(自分から来たのに豚臭いって・・・)

と心の中で吹き出すのをこらえる優也。

「アンタAクラスの木下よね!ちよつと点数いいからっていい気になってるんじゃないわよ!」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が校内にあるなんて我慢ならなの、貴女達なんて豚小屋で十分だわ!」

「言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!？」

「手が穢れるのがすごく嫌だけど薄汚い貴女達を相応しい教室に送ってあげるわ。覚悟しておきなさい近い内に始末してあげるわ」

と教室を出ていく優子(秀吉)。

「これで良かったかのう？」

とスッキリした表情で言う秀吉。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

と言っている背中ではCクラスがAクラス戦の準備をしていた。

「じゃ、俺達も準備しよう」

「うん」

「ドアと壁を使い戦線を拡大させるな！」

と虎丸が指揮する。ただいまBクラス戦なのだが問題が発生した。瑞希の様子がおかしいのだ。一向に指示を出さないので代理に虎丸を立てなんとかしのいでいる。

「やばいな。左が押し戻されている。姫路、援護頼めるか？」

「あ、そ・・・その・・・！」

とつろたえる瑞希。

「仕方ない。虎丸！左側を援護してくれ！指示は秀吉頼む！」

「わかった」

「了解なのじゃ」

「これで数分は大丈夫か。明久、なんか古典の先生を除去できる策はないか？」

と明久に相談する優也。

「うーん、よし考えた。行ってくるよ！」

と古典の先生の近くに行く。そして背中に周り。

「先生・・・ツラずれてますよ？」

「しょ、少々席を外します！」

「よし、これで大丈夫だった？」

「ああ、ナイスだ。そうだ、姫路に話をしてくれ」

「わかった」

「右側出入り口が現国に変更！」

「よし、虎丸をそちらに向かわせてくれ！他のやつらは撤退を援護してくれ」

これで少しは持つかと思い優也は秀吉に近づく。

「秀吉、少し頼む」

「うむ？わかったのじゃ」

優也は明久と瑞希の元へ向かう。

「あ・・・」

と瑞希が声を上げる。

明久と優也は瑞希の視線を追うと根本が手紙らしきものをちらつかせていた。

「そういう事か。姫路、あまり戦線に加わらないようにな。具合悪そうだからな。大丈夫だまだ次があるし、この戦いは負けないからな。行くぞ明久Fクラスに戻る」

「う、うん姫路さん体調には気をつけてね？」

「明久も気が付いたか？」

とFクラスに戻るまでの間。

「うん、どうしようか？」

「あいつの処刑か？まあ彼女いるらしいから異端審問会に引き渡してもいいが・・・やはり、あの工作は姫路の弱みを握る為か」

「そうだね。とりあえず雄二に相談しよう」

とFクラスに到着。

「雄二、根本君の制服が欲しいんだ」

と謎の発言をする明久。

「お前に何があつた？」

「厳密に言つと制服の中にある物だ」

「そのある物とは何だ？」

「言えない。察してくれ。あと姫路を戦線から外して欲しい」

「理由は？」

「これも言えない。察してくれ」

「そうか。なら二人で姫路の役割を担ってくれ。やり方は問わない。根本に攻撃を仕掛ける」

「ふむ、なら遠藤先生を手配してくれ」

「そうか、それが手っ取り早いな。わかった、手配しておこう」

「助かる」

「でどうするの？」

「お前の突出している物を使った作戦だ。覚悟決めろ」

「覚悟って・・・まさか、あれ？」

「そう、あれだ。雄二、根本の配置は？」

「これだ」

と見取り図を見せる雄二。

「よし、明久Dクラスに行くぞ。島田、すまんがついてきてくれ」

隣で補給テストをしている美波に言う。

「マジな話みたいね。わかったわ、譲崎には恩もあるし」

「そんな大した事はしていないさ」

とDクラスに向かう優也、明久、美波。

「二人とも本当にやるんですか？」

「もちろんです」

「このバカとは一度決着をつけなかりけなかったんです」

と遠藤先生の立ち会いの元、相對している明久と美波。

「でもなぜDクラスで？やるのですか？」

「コイツ観察処分者だからFクラスじゃ教室壊れちゃうんです」

ちなみにこの組み合わせになったのは優也と明久ではあまり対立することがないので不自然に思われると考えた優也の判断である。

「もう一度考えてみては？」

「いえ、彼女には日頃の礼をしないと気がすみません！」

「わかりました、お互いを知る為の喧嘩も必要かもしれませんね」

「「試獣召喚！」」

明久の召喚獣が攻撃するがすんなりかわされて壁に当たる。そしてさらに攻撃するが一発も当たらず背中 of 壁にばかり当たる。

「お前らいい加減諦めろよ暑苦しいんだよ」

「貧弱なBクラス代表はギブアップなのか？」

と挑発しているのは一度雄二の元に戻った優也。

「ギブアップするのはそつちだろ？姫路さんも調子が悪いみたいだしな？」

「お前らの相手くらい俺達で十分だしな。休んでもらってるさ」

「口だけは達者だな負け組さんよお」

「負け組？それは自分の事を言ってるのか根本くんよお」

さつきから立て続けに何かを叩く音。

「まったく暑いなエアコンきいてんのか？」

「そろそろ時間か雄二？」

「ああ、一旦下がるぞ！優也、虎丸！しんがり頼んだ！」

「引き受けた」

「了解した」

「たった二人でしんがりか？笑わせるな」

とBクラスが言う。

「いや、笑わせられるのはこっちだ。虎丸！」

「了解。試獣召喚！」

とさつきまでは指揮ばかりしていたため召喚獣を召喚する虎丸。その点数は498と金色に輝く。

「こいつのホームグラウンドで戦うなんてな」

虎丸が武器の太刀を振るうと虎と龍の形を模した衝撃波がBクラスを襲い、一掃した。

「優也。今のうちだ！」

「すまん虎丸！」

とフィールド外、つまりBクラスに入る優也。

「これも寢床のため」

と返事をし増援を倒しにかかる虎丸。すると

「明久、頼んだぞ！」

と雄二の声が響き、

「だああーしゃあー！」

とDクラスの壁を壊し入り口を作る明久。これも観察処分者の物理干渉能力を使った作戦である。

「遠藤先生、Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！」

と割り込む。

「近衛部隊・・・！」

「そう焦るな明久、こつちにも作戦がある。Fクラス讓崎、試獣召喚！」

と召喚する優也。英語なのでもちろん能力付き、昨日で少し消費したが能力使用のボーダーラインは越えていた。

「島田、召喚獣を伏せさせろ」

と言った途端巨大化させた剣でフィールド一帯を一掃する。

「危ないじゃない！」

「すまん、すまん。遠藤先生！」

と優也が呼ぶと遠藤先生は優也を通り越してその先、根本に向かって近づく。

フィールドは教師を中心に円状になっているため教師自体を移動させることで再び召喚するタイムラグと手間を減らすのである。

「Fクラス讓崎根本に勝負を申し込む！」

と、根本がフィールドに入った瞬間に優也が宣言する。

「ちっ、試獣召喚！」

たとえ、勝てる見込みがなくても召喚しなければ強制的に鉄人の根城行きである。もちろん205対406という絶望的な差である。ちなみに前が根本、後ろが優也である。

「さて、断罪の時間だ」

巨大化させた剣を縦に振り落とす。それによって根本の召喚獣が真っ二つになる。

「Fクラスの勝利です！」

と宣言する。

## 第十一問（後書き）

どうでしょうか？

今回は優也だけではなく、虎丸無双でもありました。  
それでは感想よろしくお願いします

## 第十二問（前書き）

今回はBクラス戦後会議& a m p・その他です。

ではお楽しみください

## 第十二問

「明久よ、随分と思い切った行動にでたのう」

と秀吉が明久の作った穴を見ながら言う。

「痛いよう・・・痛いよう・・・」

「なんともお主らしい作戦じゃな」

「もつと褒めてよ秀吉！」

「後先考えず自分を追い込む男らしい作戦じゃな」

「遠回しに馬鹿って言ってない？」

「しかし、召喚獣でコンクリ砕けるんだな」

「考えたのは優也でしょ！？わからなかったの！？」

「ま、それが明久の強みだからな」

と明久の肩に手を置いて言う。

「さて、本来ならこの代表を思う存分いたぶってからクラスを明け渡してもらうが、特別に免除してやらんでもない」

と言う優也の発言にFクラスがどよめく。

「落ち着け。俺はのゴールはここじゃないだろ？」

「・・・一瞬変なのが混じったが条件はなんだ」

「安心しろ、お前をいたぶるのは免除しない。条件はお前だよ」

「俺・・・だと？」

「ああ、少々好き勝手やつてもらったしな。だがお前達にチャンスをやろう。Aクラスに試召戦争の準備があるとだけ伝える。準備と意志があるだけで伝えるんだ。意味のとり間違えで宣戦布告になるんじゃないぞ」

「・・・それだけでいいのか？」

優也は少し考える。もちろん根本の制服からいかに自然に手紙を手するかだ。と考えていると

「Bクラス代表がこれを着て宣言したら許してやろう」

と言い、雄二が取り出したのはさっき秀吉の着ていた女子制服。

「ば、馬鹿なこと言うな！俺がそんなふざけたことを・・・！」

て言おうとしたら

「Bクラス全員で必ず実行させよう！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室が守れるならやらない手はないな！」

とBクラス全員の意見が一致。

「よしよし、一人を除いてまとまっているようでなによりだ」

「くっ、やめろ！寄るな！離せ変たくふうっ！！」

変態と言おうとしたところでBクラス生徒に腹を殴られる。

「とりあえず黙らせました」

「お、おうすまんな」

「明久、優也着付けは任せた」

さすがの変わり身の速さに驚く優也に雄二は声を掛ける。

「了解」

「不本意極りないがわかった」

と着付けに移る明久と優也。途中、気がついたようなので

「明久」

「うん、てい！」

「がふ！！」

と再び気絶する根本。

「これ、どう着せるのかな？」

「さあな。島田に聞いておくべきだったかな」

と言っていると

「私がやってあげるよ」

とBクラス生徒が言う。

「そう？じゃせっかくだから可愛くさせて」

「明久、それは無理だ」

「え？なんで？」

「そうそう。土台が腐ってるから」

「という事だ。ていうか、こんな格好で宣言される優子にも御愁傷様としか言えんな」

「だね」

それから女子に根本を任せた明久と優也は廊下に。

「たしかこの辺だった気が・・・あった」

と手紙を取り出す。

「これどうしようか優也？」

「捨てればいいだろ」

「だね。じゃ手紙を元の場所に戻してくるよ」

「おう、行つて来い」

「譲崎、ちよつといい？」

とBクラスからひよこつと出てきたのは美波だった。

「どうした島田？」

「いや、えつと試召戦争のお礼を言いたくて、ありがとうね」

「いや、別に大した事はしていない」

と目を逸らして言う優也。

「ねえ、優也って呼んでいい？ウチの事も名前で読んでいいから」

「わ、わかった」

「じゃ優也、戻りましょうか」

「そう、だな」

変わって明久、手紙を瑞希のカバンに戻そうとしているのである。

「さて、落とし物は持ち主に、と」

「吉井君！」

「ふえっ！いや、これは・・・そう雄二のカバンにいたずらをね・・・あれ間違えたかな？」

と言っている明久に抱きつく瑞希。

「あ、ありがとう・・・ごきます・・・私、どうしていいか・・・わからなくて・・・！」

「と、とにかく落ち着いて、泣かれると僕も困るよ・・・」

と瑞希を引き離してハツとする。こんなチャンス二度とないのに引き離してどうするのだと。

「もう一度・・・壁を壊したい！」

という結果になり瑞希から気の毒そうな目で見られる明久。

「じ、じゃあ皆のところに行こうか」

と話題を逸らすが瑞希が袖を引っ張る。

「あ、あの・・・手紙ありがとうございました」

「根本君の制服からたまたま見つかっただけだよ」

「嘘です。議崎君と示し合わしているところを見ましたから」

「お、お礼なら優也に言った方がいいよ。作戦考えたのは優也だし、僕はそれを実行しただけだし」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験の時も先生に言い合いましたし……。この戦争、私の為にやってくれてるんですよね？」

「て、提案は優也だし、それに賛成したってだけで僕は何も」

「それでも……。それでも嬉しいです。吉井君は小学生から変わらず優しくて……」

「その手紙、うまくいくといいね」

と話題変更する明久。

「はい、頑張ります！」

「で、いつ告白するの？」

「え、えっと全部が終わってからです……」

「それなら直接言った方がいいかもね」

「そ、そうですね？ 吉井君はその方が好きですか？」

「うん、僕の場合だと、顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ」

「本当ですか？じ、じゃ今言ったこと忘れないでくださいね？」

「え？う、うん」

同時期、Aクラス。

「勝者、Aクラス！」

「さすがね」

と優子が少女に言う。

「いやいや、優ちゃんには及ばないよ。にしても、楽しみだね、Fクラス戦」

「まああなたは楽しみでしょうね。こっちはいい迷惑よ」

「優ちゃん素直じゃないな」

「誰が誰に素直じゃないですって？」

少女に関節技を極める優子。

「い、痛いよ優ちゃん」

「まったく・・・」

と言い、少女を置いていく優子。

「本当に楽しみだよ。ね、優くん　って優ちゃんまってえ」

とそこにいない人に届けとばかりに言った後少女は優子を追い掛けた。

## 第十二問（後書き）

三人目のオリキャラ登場！

微妙に美波にフラグがたつたような・・・

では今回はAクラス戦！よろしくお願いします

### 第十三問（前書き）

さて今回はAクラス戦突入です

それではお楽しみください！

### 第十三問

あれから2日後、いつもの雄二のブリーフィング。

「ここまでこれたのも他でもない皆の協力があつてこそだ。感謝している」

「雄二どうしたの？らしくないよ？」

「ああ、自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ。ここまできたら絶対Aクラスに勝ちたい・・・」

「勝ちたいなんて弱気な事言つな。勝つんだろ？絶対に」

といたずらっぽく言う優也。

「フツ、そうだな。勝つて生き残る為には勉強だけではないと教師どもに突き付けてやるんだ！」

「おおー！」

「そうだー！」

「勉強だけじゃねえんだー！」

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だがこれは一騎打ちで決着をつけたいと考えている。やるのは当然俺と翔子だ」

「はっはっは、馬鹿の雄二が学年首席の霧島さんに勝つなんて、冗

「談もいい」

いいところ、と言おうとしたところで明久の頬にカッターがかすめる。そして投げた本人を見たら

「次は耳だ」

と次弾装填準備を完了している雄二がいた。

「確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。だがそれはDクラス戦も同じだった。まともにやり合えば俺達に勝機は無かった。今回も同じだ。俺は翔子に勝ちFクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

「何か考えてるのか？まともじゃないやり方を」

「ああ、一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ、内容を限定して、レベルを小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負だ」

「それだと百点で持ち越しになるんじゃないか？」

「優也の言う通りだよ。ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、俺を舐めるなよ？いくらなんでも運に頼り切ったやり方を作戦と言わない」

「じゃ集中を乱す方法を知っているの？」

「もしくは確実に間違える方法を知っている、とか？」

「そう、さすがは優也だ。優也の言う通り、ある問題が出たらアイツは間違える。その問題は『大化の改心』」

「誰が何したとか？」

「小学校だから何年に起きたとか簡単な奴じゃないか？ちなみに大化の改心は645年に起きた出来事だ」

「え、大化の改心って794年じゃないの？」

「馬鹿、それは今で言う首都が京都の平安京に移された年だ」

「お願い・・・僕を・・・見ないで・・・」

と顔を背ける明久。

「前触りが長くなったが、年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「だが、それはお前が満点取れるのが前提だろ？仕方ない。今日は放課後ちよつと教えてやる」

「じゃ是非ご教授願えますか」

「敬語で話すな、鳥肌が立つ」

「あの坂本君」

「なんだ姫路」

「霧島さんとは仲が良いんですか？」

「ああ、アイツは俺の幼なじみだ」

「総員狙えっ！」

明久の号令で一斉に靴を雄二に構える男子（優也を除く）。

「おのれ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一旦何をしたと！？」

「遺言はそれだけか？・・・待つんだ須川君、靴下は押さえつけた後に口に押し込む物だ」

「了解です隊長」

一方部外者サイド。

「どうしたのかしらみんな」

「さあな。皆女子が二人しかいない上、霧島みたいな美人が幼なじみな雄二が許せないんじゃないか？」

「優也は参加しないの？」

「別に。もてないからって他人に当たる気はないし、もてないのも

自分のせいだつて諦めてるからな」

「そうなんだ・・・」

と一緒悲しそうな表情をする美波だが優也はそれに気づかなかった。

「あ、あの譲崎君・・・」

「ん？どうした姫路」

「手紙ありがとうございました」

「俺は何もしてないさ。結果的に明久が一人で勝手に助けたただけだ。俺はその手伝いをしたに過ぎない」

「そうですか・・・？でもありがとうございます」

「まあ素直に受け取っておくよ。さて、馬鹿共を制止させるか」

そこには押さえつけられ、靴下を押し込まれた雄二がいた。

「時、既に遅そし、か。まったく、いくら幼なじみでもそれが現実になるなんてあり得ないからな。ギャルゲーばかりしてないで現実を見る」

「家帰ったら推理系とギャルゲーばかりしてる優也には言われたくないよ！」

「馬鹿言つな。俺は既に次元で割り切ってるから大丈夫なんだよ。危険なのはそれを・・・（クドクド）」

「何か・・・優也が遠いわね・・・」

と呟く美波だった。

「とにかく、小さい頃に間違えて嘘を教えたんだ。アイツは一度教えた事は忘れない。だから今年主席の座にいる。俺はそれを利用して翔子に勝つ。そしたら俺達の机はシステムデスクだ!」

ところ変わってAクラス。Fクラスの代表メンバーで試召戦争の宣戦布告をしに来たのである。

「一騎打ち?」

「ああ、Fクラスは試召戦争として代表同士の一騎打ちを申し込む」とAクラスからは秀吉の姉、木下優子が出ている。

「うーん何が狙いの?」

「もちろん、俺達の勝利が目的だ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせるのはいいけどわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「そうか。そういえば」

「Cクラスはどうだった?」

と優也が割り込む。

「あら優。どこに行っただと思ったらFクラスに行っただのね。Cは時間取られただけで何も問題無いわよ」

「じゃBクラスとやる気はあるのか？」

「Bクラスって・・・あれ？」

「ああ、あれだ。宣戦布告はされなかったみたいだがどうなるのやら」

「でもBクラスはFクラスとやりあって3ヶ月はできないはずよね？」

「どうあれあの戦争は和平交渉で終結って事になっている。規約になんの問題ない・・・Dクラスもな」

「それって脅迫？」

「人聞きの悪い、ただのお願いだよ」

と雄二にチェンジ。

「うーん、わかったわ、何を企んでいるかわかんないけど代表が負けるなんてあり得ないしね。私だってあんなのとやりたくないし・・・」

「まあ、それは頷けるな」

「そうね・・・代表同士じゃなくてお互い五人ずつ出して一騎打ち5回で3回勝った方の勝ちっていうのならないよ」

「こっちから姫路がでる事を警戒してるんだな？」

「姫路さんだけじゃなくて優もだけど。代表の調子が悪かったら万が一なんてこともあるしね。これは競争じゃなくて戦争だから」

「ならその条件を呑んでいい。だが、勝負の内容はこちらで決めさせてもらう。それくらいのハンデはあっていいはずだ」

「うーん」

「・・・受けていい」

と学年主席の翔子が登場する。

「・・・ただし、条件がある」

「条件？」

「・・・負けた方は、勝った方の言うことを一つ聞く」

と明久が鼻血を垂らして悶々としてしていると康太がカメラを取り出す

「ってムツツリーニまだ撮影の準備は早いよ！というが負ける気満々じゃないか！」

「何やってんだこいつら・・・受けるのか？」

と不思議に思いつつ、雄二に問う優也。

「じゃこうしよう勝負内容は三つは決めさせてあげる。二つはこっちで決めさせて?」

「なんだ優子?こっちが勝たないように対策か?」

と、挑発のように言う優也。

「馬鹿な事言わないで。私はクラスの事を考えて言っているの」

「さいですか・・・」

「交渉成立だな」

と今日はお開きになった。

そして翌日

「両名共準備は良いですか?」

「ああ」

「・・・問題ない」

「それでは一人目の方始めてください」

と前に出たのは秀吉と優子。Fクラスの命運を掛けた戦いが、今始

まる

### 第十三問（後書き）

どうでしたか？

今回はAクラス戦を一、二試合くらい書けたらいいなと思います。

それでは次回でまた会いましょう

#### 第十四問（前書き）

今回はAクラス戦初盤です

ではお楽しみください

## 第十四問

第一回戦、秀吉対優子。姉弟なら集中を乱す方法を知っているはずだが

「そついえば秀吉、Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

と嘘をつくが内面冷や汗ものだろう。

「じゃこつちきて」

と秀吉を廊下に連れ出す優子。

「ん？なぜワシの腕を掴むのじゃ？」

「アンタ何やったのよ。なんでアタシがＣクラスを豚呼ばりしてることになってるのよ」

「それはワシなりに姉上を演じ・・・あ、姉上！ち、違っ！その間接はそつちには曲がらなっ！」

と秀吉の悲鳴らしきものが聞こえた後優子が帰ってくる。

「さて、代わりを用意してくれるかしら？」

「じゃ、明久行ってこい」

「え？僕？」

「ああ、お前の本気を見せてやれ」

「やれやれ、しょうがないな」

「ま、まさかあなた・・・」

「そう、僕は実は・・・左利きなんだ」

もちろん召喚獣に左利きは関係なく一撃で撃破される。

「まったく・・・これだからFクラスは・・・。そんなのだから秀吉も演劇なんかに熱中してFクラスに行くのよ」

優子の避難にFクラス（特に明久が）顔をしかめる。そんななか

「誰も」

と口を挟んだのは優也だった。

「誰もお前なんかには優秀になんかなれねえよ。お前も人に言えない何かくらいあるだろ。今言つとヤバイから言わないが」

「私は今、努力してここにいます。何も努力してない奴にとにかく言われる筋は無いわ」

「秀吉だって、演劇に熱中して、努力してるんだ。演劇なんかとか言うな。道が違っただけで秀吉も頑張ってるんだ。たった一人の姉だろお前は。認めてやったらいいだろ」

「う．．」

と言い詰まる優子に更に続ける。

「完璧な人間はいない。N o b n d y ' s P e r f e c t だ。誰も完璧じゃない。高橋先生。中断してすいません。続けてください」

「わかりました。では二人目どうぞ」

「私が出ます」

と前に出たのは佐藤美穂。

「さて、虎丸は．．？」

「いないな．．朝はいたがな」

と騒いでいると

「遅れた！」

と虎丸が入ってくる。

「ほら、試合だ」

と優也が急かすと一瞬立ち止まり、そして前に出た。

「ん？どうしたんだあいつ．．」

「貴殿」

「何でしょう」

「一目惚れました、己が勝ったら貴殿に告白します」

『はい?』

と衝撃の事実にも穂を含める虎丸以外全員が目を見くする。

「まったく、あいつに羞恥心はないのか?」

「そ、それでは召喚を開始してください」

「試獣召喚!」

「さ、試獣召喚!」

科目は現国、負けるのはあり得ないだろう。

「勝負!」

と虎丸が腕輪を発動。衝撃波で一気に決めようとするが危機一髪避ける。だが切り掛かりからの切りながらのバックステップで上手く立ち回る虎丸。

そして大きく回転しながら穂の召喚獣を切り納刀すると抜刀と同時に腕輪を発動。衝撃波を当て、勝利した。

「己の勝ちだ。答えを聞こう」

「いいでしょう。約束したのは代わりありませんから」

というわけで現在一対一。まだまだ勝負は続く。

#### 第十四問（後書き）

どうでしたか？

優也の力説、虎丸の衝撃の告白。謎ばかりですね。

では次回もよろしく願います！

## 第十五問（前書き）

さて、今回もAクラス戦です。

読んでくれれば幸いです。

## 第十五問

「それでは次の人、どうぞ」

「・・・（スクツ）」

と立ち上がる康太。

「ボクが行こうかな。一年の終わりに転入してきた工藤愛子です、よろしくね」

と現れたのはボーイッシュな少女。

「教科は何にしますか？」

「・・・保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育みたいだね？でもボクも得意なんだよ？キミと違って実技で、ね」

とスカートを少し上げる愛子。

「その、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育ならボクが教えてあげようか？勿論実技で」

「フツ、望むところ」

「吉井君には永遠に必要ありません！」

と抗議する瑞希。

「姫路、明久が死ぬほど哀しそうな顔をしてるんだが」

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい試獣召喚つと」

「・・・試獣召喚」

と召喚される二人の召喚獣。康太の召喚獣は忍者の様な姿に小太刀二本、愛子の召喚獣はセーラー服に巨大な斧だった。点数はほぼ互角。

「じゃ、バイバイ、ムッツリー二君！」

と腕輪が輝き、斧で切り掛かる愛子。

「・・・加速」

康太も対抗し腕輪を使い切り結ぶ。

すると、ほぼ同時に0になった。

「リーチの差か」

「ああ、ムッツリー二はリーチが短いから深く踏み込まないといけない。その分あっちの攻撃範囲が増えるわけだ」

「それでは相打ちと見なし、代理戦を行います。代表者は前に出て

ください」

「じゃ俺が行っていいか？」

「ああ、元々そのつもりだ」

「優ね。じゃ」

ジャラ、と音を立て鎖らしきものはずれる。そして解放されたものはまっすぐ優也に向かっていく。

「な、何だ!？」

「ゆ~~~~く~~~~ん!!」

と飛び付き、もとい抱きついてくる。

「やっぱり優くんだ」

「えっと・・・」

「私だよ、晶だよ」

晶の名前に優也の頭の中にある幼なじみの顔が映る。

「ていうか、なんで縛られてるんだ？」

「それはね、優ちゃんがね？」

「この娘がいると真剣な雰囲気台無しになるから、縛ってたの」

と優ちゃんこと優子が答える。

「人の幼なじみ縛るなよ・・・」

「いいですか？」

と高橋先生が中断する。

「あ、はい。・・・離れてくれ晶」

「う？うん」

と並ぶ二人。

「科目は何にしますか？」

「なあ優子、科目選択この場合はどうなるんだ？」

「そっちでいいわよ」

「了解、じゃ日本史で」

「わかりました」

「試獣召喚！」

「紫水晶、召喚するよ」試獣召喚」

召喚される二人の召喚獣。晶は西洋甲冑に剣というものだった。し

かも腕輪持ち。

「晶も日本史得意なのか？」

「うん、この学校で優くと勝負できたらいいなって思って一生懸命頑張ったんだよ」

「そ、そうか」

「じゃ行くよ」

と晶の召喚獣剣を分割した間節剣で攻撃してくる。それを剣で弾きながら

「もしかしたら相性良くないかもな」

「えゝ相性バツチリだよ」

「お前から見たらそうだし、俺が言ってるのは武器の相性だぞ」

「えへへ、そっちだったか」

と鞘を取り出す晶の召喚獣。その鞘と柄を合体し、弓にする。

「じゃ、いっくよ」？

と矢を射つ。それを巨大化させた剣で弾く優也の召喚獣。

「おおゝ、じゃこれはどうだ」！

と矢を拡散して放つ。剣を横にして受け止めるが足に刺さり、点数が減る。

「じゃ、美穂ちゃんの人みたく、勝ったら優くんに告白するよ」

「勝利宣言か、なめられてるな俺も。こんな分の悪い賭けは嫌いじゃない」

矢を放つ晶の召喚獣に、真っ正面から突っ込む優也の召喚獣。それに臆することなくもう一本放つと点数が0になり優也の召喚獣が消滅する。

「えへへーじゃ優くん、答えを聞こうか」

と晶が近づくと優也の腕が引っ張られる。

「ん？」

引っ張っているのは美波だった。

「優也にはわ、私がいるの」

「え？ゑ？エ？」

突然の事態に驚く優也（ちなみに全部発音は『え』です）。

「じゃなみちゃん、仲良く半分こでどうかな？」

「・・・それは、いいわ。そうしましょう」

「何をしてるのよあなたは」

「俺も知らねえよ・・・」

「それでは次の人、どうぞ」

「僕が行こう」

と出たのは久保利光。

「私が行きます」

と出たのは姫路瑞希。

「ここが正念場だな」

「己の状況をよく無視できるな。あとお前の後ろにも」

現在の状況

一つ、美波が腕に抱きついていてる。

二つ、晶が正面から抱きついてる。

そして三つ、その三人の後ろに静かに異端尋問会が待機している。

という状況だった。

「彼の為に・・・僕は勝つ！君に勝利を捧げてみせるよ！」

「どうした、明久」

「いや、ちょっと寒気が・・・」

「まあいいか。姫路、あつちはやる気だ。油断するなよ」

「はい」

と言い前に出る。

「「試獣召喚」」

と二人が召喚獣を呼ぶ。科目は総合科目。点差は400点もあるのだが

「たとえ・・・これだけの差があろうとも・・・僕は負けられないんだ！」

瑞希の召喚獣が切り掛かるが、それを受け流し、着実に点数を減らす。

「そこです！」

と熱線を飛ばすが、難なく最小限に被害を減らす。

そして攻防が続き、

「勝者、Fクラス！」

「くつ姫路さん、どうしてそんなに強くなったんだ・・・！」

「私、このクラスの皆が大好きなんです。だから頑張れるんです」

「明久、行つてこい」

「え？」

と前に出る明久。

「二人とも凄かったよ。姫路さんも、久保くんも」

「はい、ありがとうございます」

「よ、吉井君・・・！」

そして二対二に。決着は代表に任された。  
。

## 第十五問（後書き）

どうでしょうか？

ちなみに虎丸×美穂は友達のアイディアです。

それでは次回もよろしくお願いします

## 第十六問（前書き）

第十六問更新です！

それではお楽しみください

## 第十六問

「最後の一人どうぞ」

「・・・はい」

「俺の出番だな」

と両代表が前に出る。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、小学生レベルで百点満点の上限ありだ！」

その雄二の発言にAクラスがどよめく。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね」

と問題を取りに教室を出ていく。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

と握手する明久と雄二

「・・・（ピッ）」

とピースする康太。

「お前の力には随分と助けられた、感謝している」

「・・・（フツ）」

「坂本君あのことがありがとうございました」

「明久のことか気にするな、あとは頑張れよ」

「はいっ」

Aクラスサイド。

「代表、後は任せたわね」

「・・・うん」

と声を掛ける優子。

「頑張つてね、代表」

「・・・わかった」

同じく励ます愛子。

「優くんいるの教えてくれてありがとね、翔ちゃん」

「・・・もう一人の人に抜かれない様に頑張つて」

「えへへ」

と笑う晶。

「クラスの命運は霧島さんに託された。頑張ってくれ」

「・・・うん」

「では日本史勝負を行います。いまから問題を配りますが始まるまで見ないように。制限時間は50分、満点は百点です不正行為は即失格になります。いいですね？」

「・・・はい」

「わかっているさ」

「では始めてください」

「優也、いよいよね」

「ああ、・・・てか俺が出た方が勝率が上がったんじゃない・・・」

「それもあるわね」

問題を見ると

（ ）年 大化の改新の年号を答える問題が

「ゆ、優也！」

「ああ、だな」

「吉井君！これで私達っ！」

「うん！これで僕らのちゃぶ台が」

「システムデスクに！」

「最下位に位置した僕らの歴史的な勝利だ！」

『うおおお！』

モニターに雄二と翔子の点数が表示される。それぞれ、

86と97。

ちゃぶ台がみかん箱になった。

「雄二！システムデスクじゃなくてみかん箱デスクになったじゃないか！！」

「・・・雄二私の勝ち」

「・・・殺せ」

「良い覚悟だ殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君落ち着いてください！」

と明久に抱きついて制止させる瑞希。

「優也はいいの?」

「まあ、どつかでミスするくらいはわかってたからな」

「姫路さん、なんで止めるんだ!こいつには喉笛を引き裂く体罰が必要なのに!」

「それは体罰じゃなくて処刑です!」

「・・・危なかった。雄二が所詮小学生レベルの問題だと油断してなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

「・・・ところで約束」

「わかってる。なんでも言え」

「・・・じゃ　雄二私と付き合って」

と、翔子の発言に皆が驚く。

「なるほど、ね」

「何が?」

と優也に明久が聞く。

「つまりは他に好きな男子がいないのも雄二を一途に思っていたからとすれば説明がつく」

「そういう事か」

「また諦めないのか？」

と雄二が翔子に聞く。

「・・・私は諦めない。ずっと雄二が好き」

「拒否権は？」

「・・・ない。約束だから。今からデートに行く」

と雄二の頭を掴む。

「ぐあつ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに」

とそのまま引きずって教室を出る翔子（と雄二）。

「じゃ、優くん私達も行こうか？なみちゃんも行く？」

「行くって・・・デート？」

「ウチも行くわ」

「じゃあレッツゴ〜！」

と連れられ出ていく優也、美波、晶。

「さて、Fクラスのみんな、お遊びは終わりだ」

「あれ、西村先生どうしましたか？」

「今から我がFクラスに補習についての説明しようと思ってな」

「ん？我がFクラス・・・？ってまさか！？」

「おめでとう、A級戦犯になったおかげで福原先生から俺に担任が変わる。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ！？』

「確かにお前達は頑張った。学力が全てではないからと言っても人生を渡っていくのに強力な武器だ。特に吉井と坂本には念入りに監視してやる、なにせ開校以来の観察処分者とA級戦犯だからな」

「そうは行きませんよ！なんとしても監視の目を掻い潜って今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

こうして一年間の騒ぎ、その始まりが終わった。

## 第十六問（後書き）

どうでしょうか？

第一巻完結！続いて二巻と行きたいのですが一つ外伝を挟みたいと思います。

来週から学校なので執筆ペース落ちるかもしれませんが。それでもよろしければこれからもよろしく願います。

外伝「とある過去と友人と」(前書き)

今回は外伝です

それではお楽しみください

外伝「とある過去と友人と」

「……」

毎日の日課としては何も無い空を眺めるだけ。優也はそう思い、今日もその日課をこなし、何も無い空を眺める。

「また、お前は・・・友達には作らないのか？」

と唯一の友人である虎丸が言う。

「作るわけないだろ？・・・ちよつとトイレ行ってくる」

そしてトイレに向かおうとする優也だったが立ち止まる。なぜかと言つと可愛らしい顔をした奴がなぜか男子の制服を着て男子トイレに行く光景。

「ちよつと待てえ！！」

「うむ？何事じゃ？」

「お前だよ！涼しい顔して男子トイレに行こうとしているお前！」

「いや、ワシは男じゃと・・・」

「そんな言い訳通用するか！」

と手を引つ張り連れだす。

「まったく、何をしでかしやがる・・・」

「じゃからワシは男じゃと言っておるつに・・・」

「いやいや、お前はまだ・・・」

といいかけたところで男の娘は優也の手を持って自分の胸に持っていく。

「えつと・・・？」

「これでワシが男じゃとわかったじゃろう？」

「あ、ああ・・・」

「やっとわかってくれたのじゃな。ワシは木下秀吉じゃ。お主は？」

「・・・讓崎優也」

「優也じゃな。よろしくなのじゃ」

と無邪気に笑う姿に優也は毒気を抜かれる。

キンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴り、そこはお開きに。

そして放課後。

「秀吉、一緒に帰ろう」

「すまんのじゃ明久よ。今日は先約があるのじゃ」

と教室をでる。

「優也、一緒に帰るのじゃ」

「・・・はあ」

結局一緒に帰る事に。

「今度、ワシの友人を紹介するのじゃ」

「・・・どうして構うんだ？」

「ワシがお主を気に入ったから、ではダメかの？」

「・・・勝手にしろ」

「うむ、勝手にするのじゃ」

と騒ぎのルーツが始まっていった。

外伝「とある過去と友人と」(後書き)

優也の過去ですね。

それでは次回もよろしくお願いします

## 第十七問（前書き）

今回から清涼祭編突入です。

それではお楽しみください

## 第十七問

一学期の試召戦争騒動、それが終わり次は清涼祭の準備を進めている。

進めているのだが。

「吉井！こいつ！」

「勝負だ！須川君！」

準備もせず野球をしているFクラス。

「まったく・・・」

「優也は参加しないのね」

「野球は得意じゃないし、鉄人にはれる可能性もあるしな」

とベンチに座って話している優也と美波。

「貴様ら、学園祭の準備をさぼって何をしているか！」

「ほらな？」

「みたいね・・・」

と苦笑気味の二人。

結局鉄人に捕まり、教室に連行。

「とりあえず優也辺りを実行委員を決めて適当にやってくれ」

と寝る雄二。

「まったく、コイツは・・・仕方ない。やるか」

「ウチも補佐くらいなら大丈夫よ。にしても試召戦争と真逆ね」

「アイツは興味ない物には冷たいからな」

「そうなの？」

「ま、とりあえず決めるか。何かやりたい事あるか？」

と案を聞くと康太が手を上げる。

「ムツツリーニ」

「・・・写真館」

「営業事態厳しいんじゃないか？ムツツリ商会の延長だろ？とりあえず保留だな。次」

次は横溝が手を上げる

「横溝」

「メイド喫茶つと言いたいところだが使い古されていると思うので  
斬新にウェディング喫茶を提案する」

「ウェディング喫茶？ウェイトレスがウェディングドレスを切るの  
か？」

「そう」

「確かにメイド喫茶は晶あたりが提案しそうだな。しかし、調達  
が困難だし、初期投資がでかすぎるだろう。これも保留。次」

次は須川が手を上げる。

「須川」

「俺は中華喫茶を提案する。イロモノ的格好で稼ぐんじゃなく、本  
格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ」

「確か須川の実家が中華店だっけ？」

「ああ、だから厨房は任せてくれ」

「じゃ中華喫茶でいいか？」

反対意見はないようなので決定。

「あとは厨房とホールの班分けだな。じゃ、ホールは明久、厨房は  
須川のところに集まってくれ」

「じゃ、私は厨房に」

「姫路さん！キミはホールの方がいいんじゃないかな！」

平然と厨房に行こうとする瑞希を止める明久。

『明久、ナイスだ』

『・・・（コクコク！）』

と明久にアイコンタクトする優也と康太。雄二が震えていたのは気のせいではないだろう。

「吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

「えっと姫路さんは可愛いからホールで接客してくれた方が店に利益が出るんじゃないかって」

「か、可愛いだなんて・・・そう言うならホールで頑張りますね」

「ウチはどうしようかしら？」

「ホールの方がいいんじゃないか？理由は明久と一緒に」

「そっか・・・じゃホールにするわね」

「美波はホール、と」

メンバー分けを紙に書く優也。

「ねえ優也、ちょっといい？」

「なんだ？」

「相談なんだけど、坂本を引っ張りだせないかな？ 優也一人じゃ負担が多すぎるし……。それに事態は深刻なのよ。」

「深刻？」

「ええ、実は瑞希が転校しちゃいそうなの」

「確かに、その可能性はあると考えていたが、姫路抜きでAクラスには勝てない。何より明久が悲しむ。よし是が非でもアイツを引っ張ってやるよ」

「優也は誰にでも優しいのね」

といたずらっぽく笑う美波。

「俺はFクラスの勝利と明久の事を考えてだな……」

「はいはい、それで引っ張ってこれそう？」

「頼んでも出るか分からないがとりあえず連絡するか」

と雄二の番号を呼び出す。

「おい、雄二。相談が」

『優也か！ちょうどいい！後で俺の鞆を家に届いて　くそっ、  
見つかった！とりあえず頼んだぞ！』

「おい、雄二！」

「どうしたの？」

「大方霧島から逃げてんだろ。鞆を届けろとか見つかったとか」

「まあいいか。家に届いたついでに相談する」

「じゃ今日は帰りましょうか」

「ゆ～～～～ん！」

「晶か」

「そうなんだよ優くん！とりあえず召喚大会一緒に出てほしいの！」

「召喚大会？あれに？何が目的なんだ？」

「えへへ、秘密」

「実は私も瑞希と出るのよ」

「なるほど、Fクラスのイメージアップ作戦か」

「そうなの」

「一番いいのは姫路ではないFクラスが優勝するのがいいんだが・  
・とりあえず雄二にも明久と組んで出てくれて頼んでみる」

「お願い」

「晶は俺と組むか」

「うん」

「ああ、優也か。済まないな」

「相談もあつたからな」

「学園祭の事か？」

「いろいろだ。とりあえず現状。美波によると姫路が転校する可能性があるらしい」

「なんだと!？」

「今後の試召戦争の為には姫路は欠かせない。そこで二人目の提案だ。明久と組んで召喚大会に出てほしい」

「ふむ・・・わかった。明日明久に掛け合ってみよう」

「すまん」

「試召戦争の勝利は俺達の悲願だ。姫路がいないと野郎共の士気も

下がるし」

「何より明久が腑抜けるからな」

「ちがいない」

と二人でわらう。

「じゃ頼む」

「ああ、頼まれた」

と握手して優也は雄二の家をでる。

## 第十七問（後書き）

どうでしょうか？

何か優也と雄二の信頼を書けた気がします。

それでは次回もよろしくお願いします

## 第十八問（前書き）

今日は多分ギャグ回です

それではよろしくお願いします

## 第十八問

「さて、姫路の転校だったな」

翌日、学校で会議。

「ああ、俺なりに考えたが3つほど問題がある」

「教室の設備と道具、クラスメートか」

「ああ、3つ目は美波が対策してるみたいだが」

「一番いいのは、Fクラス実力の俺と明久が優勝すること、か」

「ああ、だがかなり強敵ばかりだぞ？」

「……。良し優也、明久。学園長室に向かうぞ」

「一つ目の問題の為か」

「ああ」

『……賞品……として隠し』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

「ん？なんか中で話してるみたいなんだが」

「そうか。無駄足にならなくて何よりだ。失礼しまーす」

とノックして入る雄二とそれに続く明久と優也。

「失礼なガキさね。普通は返事を待つもんだよ」

「やれやれ、貴方の差し金ですか？」

と学園長を睨むのは教頭の竹原。

「馬鹿を言わないでくれ。どうして負い目がないのにセコい手を  
使わなきゃいけないのさ」

「この場合は失礼させて頂きます」

と隅の方に目をやり、学園長室を出て行く教頭。

（ん・・・？）

それを気にした優也。

「んで、何のようだいガキ共」

「今日は学園長にお話があつて来ました」

「まずは名前を名乗るのは礼儀つてもんさ。覚えておきな」

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二です。それでこつち  
が 二年を代表するバカです」

「そうかい、アンタ達がFクラスの坂本と吉井かい。でそっちは推理王の譲崎かい」

「何ですかそれ」

自覚の無い優也は学園長に聞く。

「巷じゃ有名さね。さっさと用件を話しなウスノ口共」

「我がFクラスの教室はまるで学園長の脳ミソのように穴だらけで酷い有様です。つまりは設備が酷いからさっさと直せクソババア、というわけです」

度重なる暴言に言動が綻ぶ雄二。

「アンタ達の話は良くわかった」

「じゃあ」

「却下だね」

「雄二、この人コンクリに詰めよう」

「こんなんだから却下されるのがわからないのか・・・？」

「どうやらまとめなのは譲崎だけみたいさね。まあいつもならそう言ってるんだけどね。条件付きでなら引き受けてやるっじゃないか」

「条件ってなんですか？」

と雄二と優也は考えこんでいるので明久が聞く。

「召喚大会は知っているかい？」

「ええ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「学校から、優勝者には賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランドプレオーブンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

「「なんだと!?!」」

と優也と雄二の声がシンクロする。

「それで悪い噂を聞いてね。プレミアムチケットを使って来た客を無理矢理結婚までコーディネートするつもりらしい」

「「何い!?!」」

またもやシンクロ。

「うるさいガキさね」

「これが晶が参加する理由か・・・別に断る気はないがどこから情報・・・? 優子が霧島あたりが妥当だが・・・」

「これを知ったらあいつは絶対参加する・・・行けば結婚、行かなく

ても約束を破ったからと結婚・・・俺の、俺の将来は・・・」

と二人して頭を抱える。

「ウチはなぜか美女ばかりだし、ジンクスとしては申し分ないんだよ。それに試験召喚システムもある」

「つまりは格好の獲物って事ですか？」

明久の率直な意見に学園長がフリーズする。

「とりあえず、ペアチケットは交換、まんざらでもないなら譲崎にでもあげればいい。事情を知っているこの3人が持つ事、それを条件に教室の改修をしてやってもいい」

「設備は清涼祭の利益で買うのは？」

「協力してくれるんだ、それくらいは目を瞑ってやっていい」

「じゃ受けよう。こっちからも提案がある。大会はタッグトーナメントで試合毎に教科を変えると聞いている。対戦カードが決まった科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「・・・いいだろう。それくらいなら協力しよう」

「・・・ありがとうございます」

と雄二の目付きが鋭くなる。

「そこまでするんだ当然優勝できるんだろっね？」

「勿論だ俺達を誰だと思っている」

「それじゃ、任せたよ」

「」「」「おつよ!」「」

「? 優也、どうしたの? 真剣な目で見つめて・・・」

「美波」

「うん!」

「数学を、教えて欲しい!」

美波の中でカラスが鳴いた。

## 第十八問（後書き）

どうでしょうか

優也の反応が珍しかったのでしょうか？

それでは次回もよろしくお願いします

## 第十九問（前書き）

今日も清涼祭編です

それではよろしく願います

## 第十九問

そして清涼祭当日。雄二の指揮でボロい教室は立派な中華喫茶に姿を変えていた。

「これは演劇部のクロスか？」

「うむ、そうじゃ。じゃが捲るとこの通りじゃ」

と聞く優也に秀吉が答え、クロスを捲るといつものみかん箱が姿を見せる。

「さすがに捲るのは妨害目的な奴くらいだろ。装飾もなかなかだしうまく行くな」

「・・・メニューも完璧」

と音もなく現れたのは康太で、試食用の胡麻団子を用意している。

「お、美味しいです！」

「本当ね、表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし」

「甘すぎないところも良いのう」

「じゃ僕も貰おうかな」

「俺も貰おう」

「ふむ、表面はゴリゴリではネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味  
わいがとっても　んゴバっ」

同時に沈黙する明久と優也。それを必死に蘇生させる秀吉だった。

「優くん、さあ行こうか！」

「何でお前はそんなにテンション高いんだ・・・」

先ほどの瑞希作の化学兵器を口にしたためテンションただ下がりである。

「もちろん優勝する為だよ優くんと・・・（ポッ）」

一回どこまで知ってるか学園長の約束に触れない程度に聞かなければいけないと心に誓う優也。機を取り直して対戦相手を見るとEクラス代表の中林と三上だった。

「さて、行くぜ晶」

「行くよ優くん」

「・・・試獣召喚！・・・」

点数は中林が53、三上が48、晶が351、優也は10。

「優くん、何その点数」

「いつもの事」

「じゃ任せて」

晶は一気に踏み込み、剣を関節剣にし二人を切り裂いた。

「おお」

「勝者、譲崎、紫水ペア！」

「ぶいっ！」

とブイサインをする晶。

「よしよし」

「妨害？本当にか？」

「うむ、どうやら3年のようじゃ」

「ふむ・・・ん？」

ある疑問点が一致した優也。

「とりあえず雄二に説明しよう」

「そうじゃな」

「なんだこの汚い机      ゴペツ！」

3年が抗議しようとしたところ、もう一人が前に躍り出た優也に裏拳で何かに殴られた。

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でもございましたでしょうか？」

「不満も何もこちらの『裏拳で殴る交渉術』に対する冒涇ですか？」

「何が交渉術ふぎゃあっ！」

「そして私の『キックで繋ぐ交渉術』です。最後にこちらの『全力で叩きつける交渉術』と私の『プロレス技で締める交渉術』が待っています」

「い、いや。退散させてもらっ」

「そうか。それなら      」

優也が全力で裏拳を繰り出し、雄二がバックドロップを決める。

「『これにて交渉は終了だ』」

「さて、始末してくる」

優也が二人の襟を掴み、教室を出ていくと遠くでドサツと音がしてしばらくすると戻ってくる。

クロスの中を見て、教頭が立ち上がる。それを見て優也はやはりな、といった顔になる。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れた為、暫定的にこのようなものを使ってしまった。ですが、たった今本物のテーブルが届きましたのでこちらでおくつろぎください」

と雄二が客を引き止める。そのバックには秀吉らがテーブルを運んでいる。テーブルを直に見せる事で衛生面を改善した事をはっきり示す事が出来る。

「ふう。こんなところか。そういえば優也、さっき何を使っていたんだ？」

「ん？ゴム製トンファー。一応鉄製もあるぞ」

「オーケーなぜ持っているかは聞かないでおこう」

「明久、走れ！捕まったら生活指導室行きだぞ！」

「鉄人の根城！？冗談じゃない！」

テーブル調達の名目の元、各所からテーブルをパクっている雄二と明久。ちなみに優也は妨害の為に教室に待機。

「一度使ったらこっちのもんだ！使用中の机を回収なんて出来ないからな！」

さすが雄二。あくどい事を考えさせたら右に出る者は無し。

「こうなったら、西村先生に応援を」

「明久！」

「あいよ！」

明久が脱いだ靴を雄二が蹴り、靴は連絡しようとしていた先生の携帯を弾く。

「よし、秀吉達に連絡を取った。次は休憩室だ！」

「僕と雄二はいつか停学になる気がするよ・・・」

「優くん、そろそろ二回戦だよ？」

「そうか。じゃムッツリー二、美波、姫路喫茶店は任せた」

「・・・（コクリ）」

「いってらっしゃい、優也」

「頑張ってくださいね譲崎君」

「おう！」

教室を出る。

「次は誰かな？」

「英語だから負けはあり得ないが・・・げ」

「いまこそお姉さまに害する害虫、成敗してくれます！」

「あ、譲崎君だ」

と現れたのはDクラスの清水美春と玉野美紀。美春の発言に晶が一步踏み込むが優也が遮る。

「はあ、やっぱりDクラスのクレイジーコンビか」

「なんですって！お姉さまをだぶらかす害虫め！」

「優×明？それとも優×雄！？まさかまさかの優×虎！？！？」

・・・言わずと知れたクレイジーコンビである。

「さっさと片付ける。気味が悪い」

「」「」「試獣召喚！」「」「」

「さっさと」

片付けると言う間に優也が能力を使用して一帯を切り払う。

「勝者、譲崎、紫水ペア！」

「さっさと帰るぞ。気味が悪い」

「待ってよ優くん！」

## 第十九問（後書き）

一巻で美波の彼氏になった優也は美春の一番の標的です

それでは次回もよろしくお願いします

## 第二十問（前書き）

最近執筆ペースが落ちています。誠にすみません。

今回はギャグ回です。読んでくれれば幸いです

## 第二十問

「あ、お兄ちゃんです!」

と声がすると同時に鳩尾に衝撃。

「は、葉月ちゃん。来てたんだね」

「はいです!今日はバカなお兄ちゃんに用があつて来ました!」

「明久に?明久ならもうそろそろ来るよ」

『譲崎、妹か?』

『五年後に付き合わない?』

「妹は妹でも美波の妹だ」

「はじめまして島田葉月です!よろしく願いしますです!」

ペコリとお辞儀して自己紹介する葉月。

「なんの騒ぎ?」

とバカなお兄ちゃん・もとい明久が帰ってくる。

「あつ、バカなお兄ちゃん!」

と優也と同じように鳩尾にタックルするように明久に抱きつく葉月。

「葉月ちゃん。来てくれたんだね」

「はいです！お兄ちゃんとは結婚の約束もしましたし」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ぶあつ！？」」

帰って来た美波と瑞希が明久の首筋を強打。

「優也、包丁とって？」

「待て待て待て、葉月ちゃんも悪意はないし、明久にも悪気はないんだし」

「・・・。まったく、優也に助けられたわね」

「とりあえずこれからどうするか。これは明らかに外からの妨害が続いてると見て間違いないし。葉月ちゃん。ここに来る時、変な噂聞かなかった？」

「中華喫茶は行かない方がいいって言っていました」

「それだな。ありがとう葉月ちゃん」

と、葉月の頭を撫でる優也。

「にゅ〜」

と目を細める葉月。

「あ、あとそれはどこで聞いたの？」

「それは・・・ミニスカートの綺麗なお姉さんが一杯いるお店です！」

「なんだって！？それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！我がクラスの成功の為に（低いアングルから）綿密に調査しないと！」

と一目散に教室を出ていく明久と雄二。

「あいつらは・・・」

「呆れるわね・・・」

「吉井君酷いです・・・」

「お兄ちゃんのバカ！」

順に優也、美波、瑞希、葉月の罵倒。

「明久、ここはやめよう」

「何言ってるのさ！早く入るよ！」

「明久、後生だ！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

「入るわよ。お邪魔しまーす」

「・・・おかえりなさいませお嬢様」

「おかえりなさいませなみお嬢様」

迎えるのは翔子と晶だった。

「それじゃ僕らも」

「失礼します」

「お姉さん、きれい！」

「・・・おかえりなさいませご主人様にお嬢様」

「おかえりなさいませあきご主人様にみずお嬢様に葉月お嬢様」

と同じように出迎える。

「おい、入るぞ」

「・・・チッ」

と優也と雄二が入店すると、

「・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

「おかえりなさいませ、今日は帰らないよ、優くん」

・・・二人だけアレンジがされていた。

「ウチも頑張らないと出し抜かれるわ・・・」

「お席に案内します」

Aクラスの教室は客で一杯だった。

「・・・メニューをどうぞ」

「ウチはふわふわシフォンケーキで」

「私もそれで」

「葉月もー!」

と女子はシフォンケーキを頼む。

「僕は水で付け合わせで塩があると嬉しい」

と明久が注文。

「「じゃあ、俺は・・・」」

「・・・注文を繰り返します。ふわふわシフォンケーキが3つ、水

が一つ、メイドとの婚姻届けが2つ。以上でよろしいですか?」

「全然よろしくねえぞ!?!」

「ははは・・・冗談だよな。ジョークだよな?」

「えへへ、今日は帰らないよ」

「ダメだ、目が本気だ・・・!」

「・・・では食器をご用意します」

シフォンケーキを頼んだ女子にはフォークが、明久の前には付け合  
わせの塩が、そして優也と雄二のにはそれぞれの実印と朱肉が置か  
れる。

「翔子!これうちの実印だぞ!まさかお袋おー!」

「は・・・は・・・は」

動揺する雄二ともう笑うしかない優也だった。

「つと、本来の目的を忘れるところだった。葉月ちゃんここで合っ  
てるの?」

「はい!ここで嫌なお兄さん二人がおつきな声でお話ししてたの!」

「やっぱりさっきの奴らか」

と優也の視線を追うとソフトモヒカンと坊主の二人組が妨害活動を

していた。

「さて、どうするか。晶？」

「何かな優くん」

「うおっ！」

と背中に待機していた晶。

「メイド服の予備ってあるか？」

「予備のメイド服？うん、わかったよ」

と裏側に行く晶。

「メイド服をどうするの？」

「これを、明久が着る」

「え・・・？」

「攻撃要員で顔が割れていないのはお前だけだ。そうだな、美波と姫路、身だしなみ用の物を貸してくれ。」

「よくわからないけど、はいこれ」

「優くん、これだよ」

「ありがと。今度どっか行くか」

「うん」

「お客様。足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？」

「掃除？早く済ませてくれよ？」

「ありがとうございます。それでは」

「ん？どうして抱きつくんだ？まさか俺にほれ」

「くたばれええ！」

メイドに扮した明久が坊主をバックドロップの餌食に。

「まさか、Fクラスの吉井・・・まさか女装趣味が」

「この人、今私の胸を触りました！」

「ち、ちよつと待て！ぐぶああ！」

「この公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治という大義名分を得て雄二の登場。

いろいろ問答をしている間に坊主の頭にブラを瞬間接着剤でくっつける明久。

「くそ、覚えてろよ変態！」

と走り去る常夏コンビ。

「逃がすか！」

「・・・お会計は夏目漱石が一枚か、坂本雄二を一名になります」

「もしくは譲崎優也一名でも可ですよ？」

「じゃ坂本雄二を一名で」

平然と雄二を千円で売る優也だった。

## 第二十問（後書き）

どうでしょうか？明らかに本気な翔子と晶。同じような人が二人いるような錯覚がしますね

それでは次回もよろしくお願いします

## 第二十一問（前書き）

最近更新ペースが落ちてすいません

それではお楽しみください

## 第二十一問

「やっぱりこうなったか」

召喚大会第三回戦、AとFの凸凹カップルトリオの二角、優也&amp;mp;晶対虎丸&amp;mp;美穂である。優也と虎丸はF並、晶と美穂はAクラス上位の点数だった。

「それでは、始め！」

「さて、晶は美穂を頼む」

「うん、OKだよ」

「さて、どうするか」

と呟くと虎丸の召喚獣が剣で切り掛かるところだった。

「おっとあぶねえ」

武器の大きさゆえ、真正面からは立ち向かわず、受け流すのに専念する優也。

「美穂ちゃんには悪いけどこれもチケットの為だからね」

「それは私事です！」

美穂が鎌を投げると晶は剣を関節剣にして弾く。

「じゃ、そろそろ行くかな」

優也の召喚獣が両手の剣を横にして虎丸の攻撃を防ぐと全力で押す。結果的に弾かれたことになる虎丸は驚くが遅かった。次の瞬間、優也の乱舞で地に伏した。

「おおー　じゃ私も決めないと」

剣で弾くと真っ直ぐに関節剣を伸ばす。それを避ける美穂だったが、晶の剣が動いているのがわかった。それを受け、着地する美穂だが、そこには切り掛かる晶が待っていた。

「譲崎、紫水ペアの勝利です！」

こうして三回戦終了。

「不戦勝？」

「うん。相手が食中毒で棄権して」

「食中毒だと？」

うちで必殺料理人作の商品を引いた客でないようにと祈る明久と優也だった。

「とりあえずこの状況をどうにかしないとな」

「ああ、何かインパクトがある物をやる必要があるな」

「そうだな。やはり女性陣に」

「ああ。これを島田、姫路、秀吉に着てもらっ

と取り出したのは三着のチャイナ服。

「明久と優也もチャイナが好きだよな？」

「「大好　愛してる」」

「お前ら、ホントに嘘がつけないな」

「ゆ、優也がどうしてもって言うなら・・・」

「私も吉井君がどうしてもって言うなら・・・」

「お願い二人共。ほら優也も」

「俺からも頼む」

「お前ら・・・ホントにチャイナが好きなんだな」

と頭を下げる明久と優也に呆れる雄二。

「そ、それならやってあげるわよ。お店の売上の為だからね！勘違いしないでよ！」

「そうですよね！お店の為ですしね！」

「お兄ちゃん葉月も着たいです！」

と優也に言う葉月。

「葉月ちゃんも手伝ってくれるのか？」

「お手伝い・・・？うん！お手伝いするから葉月もあの服着たいです！」

「だけどサイズが」

「・・・！！（チクチクチクチク）」

そこには必死に裁縫するエロ（ムツリニ）の姿が。さらに異様なのがそのスピードである。そして神出鬼没である。

「あと三回戦からは一般客の観戦もある。今着替えて欲しい」

「・・・雄二に浮気の気配」

「翔子！？今までいなかっただろ！？」

浮気の気配に翔子の登場。

「なみちゃんチャイナ服着るの？いいなあ」

と、後ろから晶が出てくる。

「お前はメイド服があるからいいだろ」

「そっ？似合うかな？」

とクルンと一回転する昴。

「あ、ああ。すごく似合ってる」

「ありがとう優くん あ、さては見惚れてた？」

「いや、案外仕草が上品だったって言うか・・・」

「とりあえず着替えて会場に向かってくれ。自分達がFクラスであることを強調するんだぞ」

「オッケー。行くわよ瑞希」

「はいっ」

「・・・できた」

その神業的スピードで葉月のチャイナ服を作った康太だった。

「で、あいつらを動けなくすればいいんだろ？」

「ああ。やり方は問わない。確実性のあるやり方でやれ」

と言うのは竹原教頭。

「そっちの駒は？」

「あんまり期待できそうにないな。進学を条件に釣ってみたが」

「じゃここは俺に任せてもらおうか」

「そうしてもらおうか」

## 第二十一問（後書き）

どうでしょうか

最後に見えた悪の影。どうなるのやら

それでは次回もよろしくお願いします

## 第二十二問（前書き）

毎度更新遅れてすいません

それではお楽しみください

## 第二十二問

「明久。そろそろ四回戦だ」

時計を見て雄二が明久に言う。

「もうそんな時間？」

「あれ、アキもそろそろなの？」

「実は私達もなんです」

「ふむ・・どうやら内輪揉めになりそうだな。正直キツいな。そつちもこつちも」

「そうだな。こつちの戦力も減るしな」

「お兄ちゃん、葉月を置いて行っちゃうの？」

「うーん、少しは遊べるからバカなお兄ちゃんが帰ってくるまでムツツリなお兄ちゃんに遊んでね」

「はいです！」

『それでは四回戦を始めます』

「やはりな」

と優也が呟く。

「Fクラスの君がよく勝ち残ったね」

「やつほー譲崎君に晶」

Aクラスの久保利光と工藤愛子であった。

「やつほーだよ利君に愛ちゃん」

「紫水さん・・・その呼び方はやめて欲しいといつも言っているじゃないか・・・」

『そろそろいいですか？』

「はいじゃ」

「『『『試獣召喚！』『』『』」

教科は古典。利光の得意科目であり423と金色に輝いていた。愛子も378とAクラス上位並、晶は359と二人から見ると劣り、優也は78とFクラス上位並の点数。

「くそ・・・久保は文系だからな・・・腕輪持ちか」

「僕は勝つ！勝って吉井君と幸せになるんだ！」

「さて、どうするか・・・。よし、久保これを見る！」

「そ、それは!？」

と優也が突き付けたのは明久の女装写真。

「さて、今ある幸せか、失う可能性のある幸せか。どっちを選ぶ？」

「く・・・」

「さっすが優くんあくどいな」

「まさかそんな手で久保君を封じるなんてね」

「それじゃ行くよ!」

晶が関節剣で愛子の斧を絡みとり、そこから連続攻撃を浴びせる。

「あちゃゝ負けちゃったねどうしよう」

「・・・降参します」

『勝者譲崎紫水ペア!』

そして舞台裏に

「さあ、約束のものを」

「これだ。多分明久は優勝候補に上がるだろうな」

「吉井君は誰の為に参加しているんだい？」

「別にチケット目当てじゃないさ。もし明久がチケットをくれたらお前にやるよ」

「済まないね」

「で、この燃え尽きた明久は何だ？」

「えっと、私の腕輪で・・・」

「でも明久が勝ったんだよな？」

「その後坂本の奇襲を受けたのよ」

「そういう事か」

と話す優也と瑞希と美波。

「と、もう準決勝か。相手は・・・何だと!？」

「じゃ、工作は済ませてある」

教頭室。そこには教頭と例のチンピラがいた。

「ふむ・・・。ん？まさか教科すら・・・」

「そうだが・・・」

「馬鹿者！何をしてくれた！」

『ただいまから準決勝を始めます』

相手は常夏コンビのはずだったが

「なに！？変わったと！？」

相手は常夏コンビから二年の筆頭コンビ、霧島翔子と木下優子に変わる。

「これはどういう事だ・・・？」

「アタシも知らないわよ・・・でもこの通りに行われるみたいね」

と優也と優子が言う。

「日本史ならともかく・・・ん？」

頭上のディスプレイには教科は日本史に変わっている。

「ほう・・・馬鹿な妨害もあるものだ」

「だね優くん」

「さあ晶見せてやろうぜ、日本史最強コンビの力を！」

「うん」

優也が剣を巨大化させ、晶が剣を弓矢にして放つ。

『勝者譲崎紫水ペア!』

「まったく・日本史ならいくら代表でもかなうわけじゃない  
!」

「・・・残念」

「そういえば近々ここでオリエンテーリングがあるらしい。その景  
品にもう一枚チケットがあるらしい。それに賭けたらどうだ?」

「・・・ありがとう。優也はいい人」

「ん?名前と呼ばれたか?」

「・・・名字は長いし、言いづらい」

「そうか」

「良かったね代表。いい優也、絶対に優勝するのよ!負けたら関節  
を全部逆に曲げるからね!」

「はいはい・・・」

ところ変わって第二試合、明久&雄二対常夏コンビである。

「よう、あんたら良く妨害してくれたな？」

「今回は知らねえこっちも迷惑してんだ」

と雄二が挑発する

「先輩、教頭先生に協力する理由はなんですか？」

「・・・！なるほど、事情はわかってるようだな」

「優也の情報からカマかけてみました」

実のところ優也は初日、ババアに協力を依頼された時、教頭が隅に目をやった時に疑い始め、最初の常夏コンビの妨害に教頭が同席していた事で確信を得ていた。

「進学だよ、うまく言ったら推薦状を書いてくれるみたいだからな」

「そっちの先輩も同じですか？」

「まあな」

「そうですか」

と静かに明久が言う。

『それではどうぞ！』

「」「」「試獣召喚！」「」「」

「・・・前に」

「あん？」

「前にクラスの子が言っていた」

「晒し者にされた時の逃げ方をか？」

「『好きな人のためなら頑張れる』って。僕も最近、心からそう思った」

表示される点数はほぼ互角。

「アンタらは小細工なしの全力勝負でブッ倒してやる！」

## 第二十二問（後書き）

どうでしょうか？

馬鹿なチンピラ、最強コンビの優也と晶、珍しくシリアスな明久。  
色々な人が見れました

それでは次回もよろしくお願いします

## キャラ紹介（改）（前書き）

キャラ紹介です。新キャラも追加しましたよ

## キャラ紹介（改）

・譲崎優也ゆずりざきゆうやCV杉田智和

本作品の主人公。昔は孤独だったがそれから解放した明久達を大事に思っている。雄二をいつも知的ゴリラとからかうが信頼している。論理的な考えが好きで家では推理小説を読んでいる。美波と晶と付き合ってから清水美春の最優先目標になる。

得意教科は日本史、英語

・召喚獣

召喚獣は日本の甲冑鎧に日本刀二本。能力は日本刀が一本になる代わりに両刃になり大きさを自由に変えられる能力

・龍門寺虎丸CV中村悠一

いつも眠そうにしている。そのための確な指示しかださないが指揮能力が高い。いつも木刀を所持している。

得意教科は現国

・召喚獣

虎の毛皮を羽織った鎧武者。武器は太刀。腕輪は竜と虎を模した衝撃波

紫水晶しみずしょう

CV釘宮理恵

いつも楽しそうにしている。優也を優くと慕い、人生の3分の1は優也が好き。それゆえ優也を貶す人には怒りを露にすることもあ

る。  
得意教科は日本史。本人曰く「優くと全力で戯りたいから頑張った」との事

・召喚獣

西洋甲冑に剣。剣は間接剣、金の腕輪使用で弓矢になる

## キャラ紹介（改）（後書き）

どうでしょうか。まさかの杉田さんに中村さんと釘宮さんですね。

それでは執筆ペースも落ちますが次回もよろしくお願いします

## 第二十三問（前書き）

更新ペースががた落ちですね。でもこんな作品でも

10,000PV達成!!?

いたしました。これも皆さんのおかげです。ありがとうございました。

それでは今回もお楽しみください！

## 第二十三問

「明久。あそこまで付き合わせたんだ。負けたら承知しねえぞ」

「わかってる。勉強教えてくれてありがとう。それなりに頭いいじゃん」

「お前に比べれば誰でもそうだがな」

と言つて召喚獣を動かす雄二。

「夏川！こつちは俺が引き受ける！」

とチャクラムを投げ雄二を牽制する常村。

「それじゃ僕の相手は坊主の先輩ですね」

「上等じゃねえか！多少ヤマが当たったくらいでいい気になるなよ！」

夏川がキセルを持って突っ込んでくる。

「先輩、取り乱しすぎですよ？ただの突撃じゃ避けてくれと言つてるようなもんです」

それを最小限の動きで避ける明久。

「この・・・！」

振り向きざまに横薙ぎをしてくる。

「ふっ！」

それを屈んで避け、三度木刀で攻撃する。それをなんとか防御した夏川は大きくさがった。

「試召戦争じゃ60点程度だったくせに……！」

「今もそんなもんですよ。この教科は、ね？」

「野郎……最初からこの勝負のために絞ってやがったな……！」

「その通りです」

「くそ！大人気ないが経験の差ってやつを教えてやるよ！」

そういつて召喚獣を夏川と明久、その両方から距離を取る。それを追う明久だったが。

「そら、ひっかかった」

夏川からの砂利による目潰しだった

「ふむ……」

明久のネクタイの裏に着けた盗聴器（ムツツリ商会提供）から明久と夏川の話を聞いていた優也は立ち上がる。

「どうしたの優くん？」

「すまん、ちょっとトイレ」

無論トイレ・・・ではなく向かったのは校長室だった。

「どうしたんだいクソガキ」

「もしかしたらここにも教頭の手が及んでる・・・これが」

校長室の隅にある盗聴器を握り潰す。

「教頭は俺達がアンタと繋がってることを知っていた。だからここに盗聴器があるとふんだ」

「・・・さすがは推理に関しては頭の回るガキだね」

「恐らく、これで明久が勝つたらもう一度妨害があると思う。注意しておいてくれ」

「ぐううう！」

明久がまだ痛む目を開けるとズタボロにされている自分の召喚獣がいた。そのまま意識が無くなっていく感覚に襲われるが

「明久っ！てめえ根性みせろやっ！」

雄二の鼓舞で踏みとどまる。

「いけるな、相棒？」

「・・・当然っ！僕らは絶対に優勝して設備を買わなきゃいけないんだ！姫路さんを・・・転校させるものかああああ！！！」

明久が召喚獣を突撃させ脇をすり抜け回し蹴りを放つ。

「雄二！」

「おう！」

雄二が常村に向かって拳を振りかざす。常村がチャクラムで牽制するが雄二の拳は矢の如くまっすぐ常村目がけて進んでいく。常村がチャクラムで雄二を両断する。

ギンッ

明久の投げた木刀で弾かれる。

「ぐっしまっ

」

「吹き飛ばやああっ！」

雄二がおもいつきり常村を殴り飛ばす。

「野郎！得物を手放すなんて上等じゃねえか！」

夏川が明久を攻撃する。が、それは先ほど雄二が吹き飛ばした常村

が視界に入り、動きが鈍る。

「明久！」

「待ってました！」

「くそおおっ！お前らごときに俺が  
！」

「くたばれええっ！」

左腕を切られた明久。

「お前にしては上出来だな。明久」

明久の木刀は夏川の喉につきたっていた。

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよっしゃあああ！！」

「優くん遅いなあ・・・むぐっ」

「優也遅いわね・・・んんっ」

「まったく優は・・・んんっ」

「・・・大変！」

Fクラスから康太が現れる。

「どうしたムッツリーニ？」

「・・・ウェイトレスとAクラスから数人が誘拐された！」

「誘拐犯の特徴は？」

「・・・常夏コンビに他校の生徒が数人」

「最後のあがきつてわけか・・・ん？おいムッツリーニ！Aクラスからはだれが誘拐された！」

「霧島翔子、木下優子、工藤愛子、佐藤美穂それに・・・紫水晶」

「くそつ、やっぱりな！ムッツリーニ、協力して欲しい」

「・・・わかった」

「事情は大体わかったぜ。俺も行く」

「虎丸！」

「美穂が誘拐されたんだ、黙っておけねえよ」

「二人共・・・すまん助かる！」

こうして、優也、虎丸、康太の共同戦線が張られたのであった。

「すんませーん」

「は？お前誰よ」

「だからすんませんって言ってるだろうに。とりあえず 死に腐れや！」

トンファーで前方のチンピラをおもいつきり殴る

「俺の前に出る奴は、遠慮無く噛み殺す！」

「あいつまさか譲崎優 ふべっ！」

「俺を忘れるなよ？」

「龍門寺虎丸！？」

「さて、どいつから噛み殺してやろうか。お前ら・・・生きて帰れる・・・いや、死んでも帰れると思うなよ！！！」

カラオケボックスに断末魔が響き渡った。

「いっつらどつするっ？」

「もち通報」

「でもこの傷だと俺達がやったとばれるんじゃないか？」

「そこら辺は学園ババアが手を回してる。すでにババアにも通報済みだ」

「優くん〜！」

シリアスな空気なんのその晶が優也に抱きつく。

「うわ！晶お前な・・・テンション回復早いのか」

「だって優くんが助けってくれるって信じてたもん」

「それは信頼されてることって」

「虎丸もありがとう」

「気にするなって当然の事をしたまでだ」

と美穂と虎丸が話している。

「まあ優也がいれば何も怖くないわね」

「それは過信し過ぎだって」

そうして一行は学園に帰る。そして愛子を拘束していたチンピラを康太が重点的に灰皿で殴り続けていたのは別の話である。

## 第二十三問（後書き）

どうでしょうか？

今回から10、000PVを記念して新しい企画を始めます。その名も

「このネタどこで使われたでしょうか？」

そのまんまですね。

今回のネタは

家庭教師ヒットマンリボーン  
と

魔法少女まどか マギカ

の二人です。見つかったら感想ください。

それでは次回もお楽しみください！

## 第二十四問（前書き）

毎回毎回執筆ペースが遅れてすみません

では

このネタ、どこで使われた？の答えあわせです

家庭教師ヒットマンリボンは優也の噛み殺すです。トンファー使用という共通点があるので

魔法少女まどか マギカは、美波の何も怖くないですね。声優ネタです

それではお楽しみください

## 第二十四問

「さてババア説明を聞こうか」

「そうかい。竹原はウチの生徒まで使ってそんな事を。すまないね」と優也に頭を下げる学園長。

「そこまで妨害する理由は何なんだ？」

「実は、あの白金の腕輪、欠陥があつたのさ」

「なるほどな。常夏コンビが出場していたのも頷ける。で、その欠陥ってなんだ？」

「一定水準の点数を持っているやつが使つと暴走するのさ」

「ふむ。だから暴走するように常夏コンビを進学という甘い蜜で誘き寄せたのか。俺達を擁立したのもそれが原因か」

「そうさねもう妨害があるとは思えないがね」

「だが晶が使つと暴走するか・・・八百長にならないように負ける必要があるか？」

「そんなのお前らしくねえよ」

「雄二・・・！」

「明日は正々堂々と戦おうぜ。明久もそう思ってるはずだ」

「ああ、わかった。暴走しそうになったらお前にやるよ。ババア、こいつの点数なら大丈夫だろ？」

「ああ、一定水準は平均点くらいさね」

「じゃ明日の戦いは負けねえぜ？」

「ぬかせ。泣きべそかくんじゃねえぞ？」

と拳を打ち合う優也と雄二だった。

清涼祭2日目。無事決勝まで残った優也達だが

「眠・・・」

「まったくだ・・・」

「だね・・・」

3人とも目にクマを作っている優也、雄二、明久。

「大丈夫なの優也？」

と優也の状態を心配する美波。

「大丈夫だ・・・だが少し寝たい」

「じゃあ・・・私が膝枕、してあげようか？」

と照れ気味に言う美波。

「3人しかいない女性が一人でも抜けたら店ががた落ちだ。この店で設備買わなきゃいけないんだから店で頑張つて欲しい」

「じゃ優くん私の膝枕で寝る？」

と現れたのはメイド服姿の晶。

「お前は大丈夫なのか晶？」

「うん」

「それじゃ助かる」

そして4人は屋上に向かった。

「じゃ、行ってくる」

「悔いの無いように頑張るのじゃぞ？」

「・・・どつちも頑張れ」

そしてステージに

『それでは選手の入場です！まずは赤コーナー、二年の最有力候補を退け決勝まで進んだ譲崎優也君と紫水晶さん！』

と入場する優也と晶。

『青コーナー、吉井明久君に坂本雄二君です！こちらも強敵の三年生を抑え、決勝に進んだのはなんとFクラスのコンビです！これはFクラスの認識を改める必要がありますね！』

と入場する明久と雄二。

「今のは姫路の父親に好印象だな」

「そうだね。どっちが勝っても僕たちの勝ち。手を抜く気は・・・無いよ」

「それでいい」

『それでは試合科目は化学、どうぞ！』

「」「」「試獣召喚！」「」「」

と召喚獣を呼ぶ。

「あつ」

「どうした晶？」

「化学苦手・・・」

「なにい!？」

点数は73と215。こちらは優也と晶。対する明久と雄二は56と264。一見互角である。

「よし俺は明久か」

「行くよ優也！」

明久が木刀で切り掛かるのを刀を×の様にして防ぐ優也。

「優也にはお世話になりっぱなしだからね。手を抜いたら、失礼だから！」

「ああそれでいい。獲物を狩るならキツネになれ！食われるだけの豚になるんじゃないぞ！」

刀で押し出す優也。そこに刀を横にして一閃。それを間一髪防ぐ明久。

「だが、これで！」

いつもの様に片方の刀で受け止め、もう片方で切る。

「さてと」

「優くん優くん負けちゃった」

と拳を掲げる雄二の召喚獣。

「よくやったな晶」

と頭を撫でる優也。それを目を細め受け入れる晶。

「さて、こっから勝負だ」

「ぬかせ、このろけ野郎」

「あんまり人面ゴリラが吠えるなよ？」

こうして決勝戦第二回戦が始まった。

## 第二十四問（後書き）

どうだったでしょうか

今回の

このネタ、どこで使われた？は

とある魔術の禁書目録ですわかりますか？  
では感想どうぞです

## 第二十五問（前書き）

さて更新です

この前のネタは御伏四さんが答えた一方さんのネタです。

それではお楽しみください

## 第二十五問

それぞれ点数は優也が42、雄二が61。

「行くぜ！」

パンチのラッシュを浴びせる雄二。それをいなし続ける。

「どうした！晶と戦ってへばったか！」

「舐めるな！」

渾身のパンチを打ち込む雄二。

「くそ！・・・いない!？」

そして雄二の上空からの奇襲。

『優勝、吉井、坂本ペアです!』

「お帰りなさいお兄ちゃんっ」

帰って来た優也達を迎えたのは綺麗に鳩尾にタックル・・・もとい抱きついた葉月だった。

「格好よかったわよ優也」

同じく迎えるのは葉月の姉である美波。

「ありがとう美波。そういえば腕輪のデモンストレーションがあるとかいったよな」

「確かもうすぐのはずだよ」

と答える明久。

そして晶と合流して特設ステージへ。

「いまからデモンストレーションを始めるよ。坂本はこれ、吉井はこれ、あと譲崎はこれさね」

「俺の分もあるのか」

「陽春の腕輪さ今のお前さんには丁度いいネーミングだろ？」

「確かにな」

「キーワードは同調召喚シンクロさ。あと紫水、譲崎の体にどこでもいいから触りな。」

「はい」

「じゃ四人とも始めてくれ。坂本フィールドを展開しな。キーワードは起動アウェイクンだよ」

「起動！」

教科は世界史。

「どうやら教科はランダムみたいだな」

「だけど坂本自身も召喚獣を呼べる様にしてある」

「そうか。じゃ」

「」「」「試獣召喚！」「」「」

「召喚したね。じゃ最初は吉井、キーワードは二重<sup>ダブル</sup>召喚」

「二重召喚！」

そう唱えると明久の世界史の点数を二分してもう一体現れる。

「よしよし。じゃ最後は譲崎だよ」

「よし同調召喚！」

今度は優也の点数に晶の点数が追加され、晶の召喚獣は倒れる。

「これは相手に点数を譲渡する能力だよ譲渡した素体がダメージを受けるとその分点数が減る。代わりにどっちの点数でダメージを受けるか選べる。あとどっちかの点数が無くなると解除されるから気をつけるんだよ」

「要するにスリーマンセルが基本になるな」

「そついう事さね」

そして後夜祭。Aクラスの主要メンバーを含めFクラスが打ち上げを行っていた。

「晶。これからも俺に関わるといような事が起きる。あれ以上の事も起こるかもしれない。引くなら今だぞ。それでもお前は俺のそばにいるのか？」

「優くんの為ならたとえ火のなか海の中さらには槍雨のなか！だよ。それにまた優くんが助けてくれるから」

今まで見せた事のない様な可愛らしい笑顔で言う晶に優也は面食らいながら顔を赤くする。

「そんなしおらしい話題じゃなくて、もっと楽しい話題にしよう？」

「ありがとうな晶」

「ん？どういたしまして」

「・・・やっぱりお似合い」

「そうね。どれだけ優の事好きなんだか」

「でもそれは晶の長所だよな」

端から二人の様子を見守る翔子、優子、愛子。

「・・・そういえば雄二。グランドパークに行く」

「あ、あのチケットなら優也にあげちゃったんだ悪・・・ギヤアアアア！」

「・・・まあいい。オリエンテーリングでは絶対にゲットする」

「俺に拒否権は無いのか？」

「・・・手に入れたら行くって約束した。約束破ったら行くとも約束した」

その奥では酔った瑞希が明久に詰め寄っていたとき。

## 第二十五問（後書き）

どうでしょうか

二巻完結！次はオリエンテーリングを挟んで3巻に行きたいと思います。

さて今回のネタは

めだかボックス

です。 解答お待ちしております

外伝「オリエンテリングとお互いの幸せ」(前書き)

今回はオリエンテリング回ですそれではお楽しみください

前回のネタは

めだかボックスの人吉善吉の引くなら今だ  
です

## 外伝「オリエンテーリングとお互いの幸せ」

清涼祭が終わり、学園主催のオリエンテーリングをすることに。

「さて、グループのメンバーはどうするか。虎丸と須川でいいか」

「そうするか」

「ああ、よろしく頼む」

と優也の提案に賛同する虎丸と亮。

「じゃ、俺は明久と秀吉か」

「そうだね」

「うむ」

と同じくチームを分ける雄二、明久、秀吉。

「さて、どうするか」

優也達の目の前にあるのは問題の山。これが景品の在処になっている。

「じゃ、俺は英語と英語Wと日本史と世界史、虎丸は現国と古典を。須川は他をやってくれ。虎丸は終わったら須川に協力を」

「了解」

「わかった」

そして十分後

「よし一つ」

「俺もだ」

「早いなお前達・・・」

もう在処を探し当てた二人に驚く亮。

「これは・・・ストラップか確かノインとかフィとか言う名前だったか。これは葉月ちゃん用だな」

と一つ目の景品を探し当てた優也。

「次は俺の奴だ」

そして向かうと

「やはり来ましたかこのお姉さまを誑かす豚野郎が！」

「よくも私達にAクラスをぶつけたわね・・・！」

「よくも召喚大会でボロクソにしたわね！」

と優也に恨みを持つ三人、順にDクラスの清水美春、Cクラス代表  
小山友香、Eクラス代表中林宏美である。

「はあ。美波には彼氏が出来たんだから諦めるだし、あれを考えた  
のは雄二だし、お前が弱いだけだ」

名乗りを順に答える優也。それにより女子は完全に怒っていた。

「」「試獣召喚！」「」

女子三人が召喚し、応戦しようとするが優也が遮る。

「試獣召喚。さてハンデをくれてやろう。俺は一人で戦う」

「味方の点数を減らさない為に降参かしら」

「とても言うと思ったか？お前相手に遠慮など      これからも  
ない！」

三人の召喚獣をめつた切りにする優也。

「さて、景品は・・・グランドパークのチケットか。これは霧島用だ  
な」

「さて次は、と」

そのあとはあまりいいものはなかった

「・・・グランドパークのチケットがなかった」

と残念そうにする翔子。

「そんな霧島にプレゼントだ」

「・・・優也？これはチケット・・・どうして？」

「どうしてって？」

「・・・優也は三枚必要だから」

「美波には映画に1日デートで許してもらったよ。さ、受け取れよ。とられないように先取りしたんだ」

「・・・ありがとう。優也はいい人」

「霧島・・・どういたしまして」

いい人と笑顔で言われ顔を赤くする優也。

「・・・名前」

「え？」

「・・・名前。翔子でいい」

「そうかい。じゃ翔子」

「・・・何？」

「幸せになれよ。お前と雄二の幸せを待ってるよ」

「・・・それを言うなら優也も。晶と幸せになるのを待ってる」

「ありがとうございます」

と話していると

「ゆ〜くん」

「うわ！晶！？」

「うん 翔ちゃんと何話してたの？」

「ん？そうだな。うーん、自分と友達の幸せについて、だな」

「・・・うん」

「チケット手に入らなかったんじゃないっけ？？」

「・・・優也が予約してくれた」

「ま、約束だし他の手に回ったら厄介だしな」

「厄介って？」

「本当アイツが手に入る前に割り込めてよかったぜ・・・」

「えっと清水さん？」

「そうだ」

美春が手に入ると美波に結婚を申し込むだろうと思いホッとする優也。

「じゃ帰るか」

「あ、優也ちょっといい？」

「ん？明久？」

「ストラップ当てなかった？キツネがモチーフのキャラの」

「あ、これが」

ジャラとストラップを出す優也。

「そうそう、それだよ！優也、それ葉月ちゃんにプレゼントしようと思ってたんだけどもらっていい？」

「俺も葉月ちゃんにあげようと思ってたからいいぜ。ただし、お前があげるんだから俺の名前は出すな」

「え？どうして？」

「その方が葉月ちゃんのお前の好感度が上がるからだ」

「うーんよくれたわからないけど了解」

「あの豚野郎・・・とことん美春の邪魔をしましたね・・・！」

「それじゃ清水さん、こんなのはどうかな？来週強化合宿だから・・・。」

「それはいいですね。豚野郎の地位とお姉さまの好意を引き下げる事が出来ます・・・。」

幸せの影には陰謀あり、そんな今日この日だった。

外伝「オリエンテーリングとお互いの幸せ」(後書き)

どうでしょうか？

あれ？翔子にもフラグ立った？そんな回でした。

さて、今回のネタは

めだかボックス

です！ちなみに二つあります

それでは次回もよろしくお願いします

## 第二十六問（前書き）

さて、今回から強化合宿編です

前回のネタは

球磨川のこれからもないと

めだかのとても言うつと思ったか  
です

## 第二十六問

学園祭が終わった数週間後学力強化合宿がある。あるのだが

「ふむ」

優也の手には脅迫状。内容は「あなたの近くにいる異性に近づかない事」と書かれている。

「これだから小物は」

優也は教室に行くとその脅迫状を破り捨て処分。

「すまん、資料を作っていて遅れた。いまからHRを始めるぞ」

資料を入れた段ボールを持ちながらFクラスに入ってくる鉄人。

「いいかお前ら、Fクラスは

現地集合だからな」

『案内すらないのかよ!』

というありがたい言葉のち電車で合宿先に向かう明久達だった。

（脅迫状？奇遇だな俺にも届いた。内容は・・同じみたいだな。差出人が予想出来る上にあんまり大した脅迫じゃなかったからその場で破って捨てた）

（じ、じゃ犯人は？）

（まあ待て、やるなら大々的に、そして派手にだ）

（なるほど大々的にやってプレッシャーを掛けたり逃げれなくするという事だね）

（頭が回る様になって何よりだ）

と会話していた明久と優也。

「ねえ優也。心理テストする？」

「心理テスト？漢字は大丈夫なのか？」

「難しい漢字にはルビがふつてあるから大丈夫。じゃ緑・オレンジ・青で連想する異性を挙げて」

「緑が姫路で、オレンジが美波、青が晶、かな」

「そっかオレンジね」

「よっと」

そこから本を取る雄二。

「緑は友達、オレンジが元気の源、青は・・・なるほどな」

「ちょっと坂本！返しなさいよ！」

「悪い悪い面白そうだったからつい借りちまった」

その後悪魔（姫路料理の妖精）の誘いにより明久が轟沈。優也達は  
その対処に追われた。

合宿先に着き、明久を看病する男子陣だった。そこに  
「アンタ達！」

と乱暴にドアが開かれる。

「なんだ文化系ヒストリーに体育会系ヒストリーが何の用だ」

「何の用じゃないわよ！これアンタ達が仕掛けたんでしょ！」

と体育会系ヒストリーことEクラス代表の中林宏美が持っているの  
は小型の盗聴機。

「は？何を言つて・・・なるほどな。そういう事か」

「何の騒ぎ？って優くん？」

「ああ、紫水さん。あなたの彼氏さんったらあなたという女がいな  
がら覗きなんてしたのよ？」

とひょっこり顔を出した晶に文化系ヒストリーことCクラス代表の  
小山有香が言う。

「優くん、本当なの・・・？」

だが優也は答えない。何かを必死に押さえ込む様に

「・・・ッ！」

その結果晶は走り去って行った。

「さあ、白状したらどう？」

「・・・」

「何？図星で言い訳すら出来ないの？」

「プッ、アッハッハハハハ！」

そして優也は吹き出す。

## 第二十七問（前書き）

今回は多分雑じり気のないシリアス会だと思っています

それではお楽しみください

## 第二十七問

「優也？まさか・・・」

と優也のトラウマを思い出す明久。そしてひとしきり大笑いした優也はぐったりとうなだれる。

「てめえ・・・ぶざけんな！冤罪に飽き足らず、不必要に晶を傷つけやがって！誰がてめえらなんかを覗くかよ！なんでそんなハリリスクノーリターンな事を誰がするかこのゲスの集団が！」

顔を上げて激昂する優也。自分がののしられても何とも思わないが友達をバカにされるのが許せないのが優也である。

「ゆ、優也！気持ちは分かるけど落ち着いて！」

と優也を止める明久。

「まったく、胸くそ悪いな畜生！」

明久を振り払って部屋を出ていく。

「さて脅迫状だったな」

と雄二が明久に聞く。

「うん。でも優也が犯人を割り出しかけてるみたいだし無理に覗きなんかしなくても」

「あんな事があつた以上、アイツは巻き込めねえよ。丁度いい知らせだ。どうやらお前の脅迫犯が俺の事件の犯人と同じらしいとムツツリーニから情報があつた」

「雄二もなんか脅迫されたの？」

「いや、脅迫じゃないがこの前無理やり言わされた翔子へのプロポーズの音声が捏造されていた。翔子は機械オンチだ。録音はおろか変換からプレイヤーに入れるなんてアイツには無理だ」

「ともあれ雄二は協力してくれるんだね」

「ああ、アイツが腑抜けると調子が悪いからな。さっさと戻ってもらわないとな」

「西村先生、俺の部屋はどこだ」

「お前は島田とAクラスの木下と紫水だな」

「……ッ。そうですか。手を煩わしてすみませんでした」

「坂本達は覗きをするのか？」

立ち去ろうとする優也を呼び止める鉄人。

「さあ？俺には関係ありません。・・・なるほど。俺を親しい女子で固めて部屋から出さない作戦ですか。雄二は霧島をぶつけたらすぐにカタがつく。あいつは異性の作戦に甘いですから」

「・・・何かあったのか？」

「別に、何もありませんよ」

「お前が参加しないならせめて部屋の女子には早めに誤解を解いておいた方がいいぞ」

「必要ありません。女子から見たら俺を3人で縛りつけた方が都合がいいみたいですから」

「・・・そうか。この合宿がお前にとっていいものになって欲しいと祈っている」

「くそ・・・」

覗きを行っていた雄二は危険に晒されていた。教師は物理干渉能力を持ち、化学の布施、保健体育の大島、そして最終関門には鉄人と鉄壁の布陣が組まれていた。なんとか明久を鉄人の元へ送るが恐らく上手く行かないだろう。その間に康太が大島にやられ、そのまま一行は臨時補習室に連行された。

優也は重めの気持ちで自室の扉を開ける。

「優じゃない。遅かったわね」

「・・・少し鉄人と話してた。それよりいいのか？雄二達は覗きをすると思うぞ」

「あつちは代表がいれば大丈夫よ」

「だろうな。それより俺を縛りつけた方が有益なんだろう？」

優也の所々刺々しい言葉が飛ぶ。

「アンタ本当に覗きをしたの？」

「どう思おうが人それぞれだ。疲れた、俺は寝る」

「晶。晶ってば」

「ん？な、何優ちゃん」

「何かの間違いよアイツが友達を・・・あなたを傷つけるはずないじゃない」

「そう・・・かな」

そう言い聞かせる優子達を遠目に見ている美波だった。そして一日目の夜は更けていく。

## 第二十八問（前書き）

今回もシリアスです。なんと今回は美波が・・・！

## 第二十八問

「そうか。教師の防衛布陣か。多分今日は生徒も参加するだろうな」と昨日の報告を聞き推測する優也。

「だろうな。定石としてA、Bクラスを仲間にするというのがあるが」

「無理だな。Aの男子代表は久保だし、Bはまとまりが無いまだ平賀のDの方が使い物になる」

と雄二の考えを切り捨てる優也。

「お前が言っただからそうなんだろうな。じゃ他のFクラスを誘うか」

「ま、団結力や突発性はFクラスが一番だな。さて、相談はここまです。女子に睨まれる」

「・・・ああ」

「そうだ、お前らの日本史と英語見てやるよ」

「大丈夫なのか？」

「今は自習の時間だし本来はモチベーション向上が目的だしな」

と教科書を開く優也。

「すまん」

「俺が勝手にやっている事だ、気にするな」

「・・・優也」

「ムツツリーニ？どうした」

「・・・犯人の特徴をみつけた。犯人はお尻に火傷の跡がある」

「そうか。ありがとうこれで充分だ。覗きの方に集中してくれ」

「・・・わかった」

「始まったわね」

「関係ねえな」

そして夜、Fクラスが行動を開始した頃だった。

「万が一って可能性もあるしあたしは行くわ、Fクラスだし」

「ああ、行ってこい」

「晶と話なさいよ？」

と優也に耳打ちして部屋を出ていく優子。

「話す事なんてねえよ・・・」

「ん？電話？」

と携帯を持ち部屋を出ていく晶。

「ねえ優也？」

二人きりの部屋の中で美波が問いかける。

「なんだ？」

「晶何かおかしくない？晶らしくないって感じ」

「大方文化系ヒステリーに丸め込まれたんだろ？名前も文化系エスパ―ヒステリーに変更だな」

「わかつてるの？じゃ何で止めないの？」

「今回は教師も覗きによるモチベーション向上を期待してるからな」

「覗きによるモチベーション向上？」

「ああ、防衛布陣が強力になるほど、突破するために点数を増やす、つまりは勉強しなければならぬと思わせて勉強させるっていう事だ」

「な、なるほど」

「だから教師からしたらこれは良い事なんだ。さすがに突破されたら本末転倒だな」

「確かにね。ねえ優也？」

「なんだよ？」

「教師からしたらこれは良い事なのかもしれない。けど優也からしたら悪い事ばかりよ・・・」

と優也を膝枕する美波。

「美波・・・？別に昔から嫌われ体質だし、一人には慣れてた」

「でもウチは優也が幸せになって欲しいの・・・」

「俺に幸せ、ねえ。それほど対極、縁遠い、似合わない言葉はねえな」

「優也・・・」

と頭を撫でる美波。

「俺に幸せなんてものがあるならそれは今だよ」

「優也・・・。じゃ、覗きに参加してきなさいよ」

「は？」

「来たわよ！Fクラスの譲崎よ！先生、Fクラス譲崎に勝負を申し込めます！」

「・・・明久、頼む」

「え？う、うん！代わりにFクラス吉井明久が受ける！試獣召喚！」

「どついつ事・・・？」

優也は真っ直ぐ奥の方を見ている。

「どつやらの豚野郎はやる気がないようです！無視しなさい！」

そんな美春の指示が飛ぶと優也はやっぱりな、と呟きその場から去って行った。

## 第二十八問（後書き）

どうでしょうか？

現れたと思ったら何もせずに立ち去った優也。一体何が目的なのか？

## 第二十九問（前書き）

今日は優也が生き生きする回です

## 第二十九問

「ふう」

部屋に戻った優也はため息をつく。

「どうだったの？」

「あつちは翔子に優子、工藤などのAクラス陣に、エスパーヒステリーと低能ヒステリーにツインドリルファントムモンスターがいた。さて、今回美波には辛い目にあう可能性大だが、いいか？」

そして優也の説明を聞いた美波は

「いいわ、やって」

と返事した。

「鉄人、ちょっといいか？」

「ちゃんと西村先生と呼べ。で、なんだ？」

「ああ、ここが一番広いところに全生徒と教師、ババア長も、集めて欲しい」

「一体何をするつもりだ？」

「なに、推理小説の真似事さ」

その後、生徒と教師は集められた。

『集まってもらって済まない。俺はFクラスの譲崎優也だ。今回集まってもらったのは他でもない、覗き騒動の事だ。』

ざわざわと周囲が騒めく。

『まず、発端から説明しよう。発端は俺と同クラス吉井明久が一通の脅迫状を受け取った事になる。そして同クラス坂本雄二のプロポーズを捏造した犯人が一致、同クラス土屋康太の情報もあったが、時間外は風呂は施錠されている。そこで俺達は覗きに踏み切った、という事だ』

未だに騒めきがやまない生徒達に優也は再び言葉を紡ぐ。

『首脳陣以外のFクラス、並びにE、Dクラスの男子の皆、済まない。単純な覗きにした方が参加するし、土気の問題でもこの策が一番だったんだ』

「前置きが長いさね。これを言う為にここに集めたわけじゃないんだろ？」

『さすがババア長。そう、もちろん謝るのも本題だが、俺にはまた別に目的がある。昔、推理王なんて厨二ってるあだ名をつけられた俺が、無策で事件に挑むわけが無い！今から当ててやるよ、この騒動の原因、俺や明久を脅迫したやつを！』

そして今一番の騒めき。

『さて、Fクラスの首脳陣は立つてくれ』

その言葉に明久、雄二、秀吉、康太、虎丸、美波、瑞希が立つ。

『最初にこの脅迫状だが二人共にあなたの異性に近づかないこと、と書いてある』

と、脅迫状をパンパンと軽く叩きながら説明する優也。

『だから男子は座ってくれ』

その言葉に男子が座る。

『さて、この二人だが、脅迫状を出すほど熱狂な信徒がいると俺は見た。姫路にそんな奴は聞いた事がない。だがな、美波は違う。故に』

犯人はDクラス、清水美春だ！』

そう優也ははっきりと宣言する

### 第三十問

「はあ？一体何を言うと思えば美春が犯人？馬鹿も休み休み言いなさいな」

『（ピキッ）じゃあ聞くが、お前尻に火傷あるだろ？』

「なっ！どうしてそれを！？ふ、ふん！馬鹿に変態とは救えませんか」

『（ピキピキッ）ムツツリーニ、例の物を』

怒りを内に秘めてムツツリーニに指示を出す。

「・・・了解」

優也の指示で盗聴機をスピーカーに繋ぐ。そして例の「犯人の尻に火傷がある」という情報をスピーカーを通して流す。

「なっ！美春を嵌めましたね！」

『馬鹿が誘導尋問の意味を辞書で引きやがれ』

一部始終に周囲が騒めく。

「ていうか、よくあそこまで清水の罵倒に耐えられたな」

「そうだね。場を壊したくないのもあるし、ただの八つ当たりと思われたくないからじゃないかな」

「そうだな。お前は清水を責めるか？」

「僕は・・・そうだね。これ以上美波や優也に干渉しないなら、僕は許すよ」

「ま、お前はそうだろうな」

と話す虎丸と明久だった。

『さて、教師の皆さん。一生徒が個人への嫉妬、復讐の為に脅迫及び覗きへの誘導。これは十分にこいつを観察処分者にする余地はあると思いますがどうでしょう？言っておきますが、教師が反対するなら引き下がるのでご安心を。Cクラス代表やEクラス代表のように見苦しくはありませんから』

「「誰が見苦しいですって!？」」

『いちいち反応するから見苦しいなんて言われるんだよ』

「ふむ。じゃあ清水美春を観察処分者に小山友香と中林宏美を観察処分者候補に認定する」

と学園長が宣言する。

「どうして私達が候補なのですか!」

「西村先生に聞いたが譲崎達に冤罪を掛けたみたいだね。それが理

由だよ」

「ぐっ……」

「譲崎、言いたい事は以上かい？」

『ああ、つまらない事に時間を割いてもらってすみませんでした』

そしてその後は学年全体で自習に。

「まったく、未遂で終わって良かったな」

「ま、その点に関しては礼を言う。ちゃんと音声のマスターを壊せたからな」

犯人からマスターを壊せて満足な雄二。

「ま、ちゃんと勉強しておけよ？」

「な！？まさか……」

「可能性はある。人は窮地になるととんでもない事をするからな」

「ああ、気をつけておく。で、紫水とはどうなんだ？」

「ん？晶か。どうだろうな」

「別れるなんて止めるよ？翔子が悲しむ」

「おや、優しいな」

と冗談めいて言う優也。

「ば、馬鹿言うな！必要以上に悲しませる必要はないからだ！」

「それが優しさだったの」  
と小声でいう優也だった。

「じゃ明久達の部屋行ってくる」

「行つてらっしゃい優也」

と見送る美波。

「今回は拘束されてたつて言ってもいいくらいだしね。少しは楽になったのかしら」

「そうね。優也にも言つたけど今回が優也にとっていい出来事になつて欲しいわね」

と心配する優子に賛同する美波。

「小山さん・・・大丈夫かな？」

と小さな声が聞こえる。その主は晶だった。

「晶まだあの人の事に掛けてるの！？あの人は優也を陥れたのよ！？」

「でも優くんは・・・」

バシン！

と部屋に音が響く。美波が晶を叩いた音だった。

「あんなね、優也の彼女でしょ！？あんなが一番優也を信じてあげなくてどうするの！？」

と晶の肩を揺らしながら必死に訴える美波。

「優也はね！あんなが逃げた後言っただわよ！アキ達友達を傷つけたって！それにあんなを不必要に傷つけたって！優也は自分よりも他人の幸せが優勢なんだから、支えてあげなくてどうするの！」

「優くんは・・・許してくれるかな？」

「許してくれるわよ、絶対に！」

「う、うんわかった」

そして最終日。特に問題は無く生徒は帰宅。一緒に帰る優也と晶だったが

「優くんは・・・許してくれる？」

「まったく目遣いでいつの事言っただよ。いいか？今回はお前の

非じゃない。ま、誰彼構わず信じるな。これだけだ」

「う、うん！わかったよ！」

「ま、そうだな。」

もう一つ、と前置いて話す優也。

「これからは今回以上の事が起こる。絶対お前にも迷惑以上の事が起きる。だから、もう俺に近づくな」

「え・・・？」

### 第三十一問（前書き）

今回からオリジナル展開です！

### 第三十一問

「さて、今回の議題はどうやってFクラス譲崎優也に復讐するかです」

空き教室に集まる美春、友香、宏美、ついでに根本。

「だが、下手を打てばみんな観察処分者になる恐れがあるのでは？確かに復讐以外にカモフラージュ目的の大義名分があるが」

「恭二？何その大義名分って」

「進学だよ。騒動ばかり起こして学校の評判を悪くして進学に影響が出るんだ、ってな」

「それでいいとして後は具体的な方法かしら」

「もちろん、試召戦争です。BCDEクラスで同盟を作り大義名分を盾にあの豚野郎を抹殺するのです！」

「清水さん。唯一の脅威であるAクラスはどうする？友香、Aクラスのあいっは？」

「ああ、譲崎と別れてからは私にべったりだわ。彼女を駒にしてAクラスとも同盟を結ぼうかしら」

「あの豚野郎、いい気味です！」

ところ変わってFクラス。

「最近荒れてるっていうか、何事にも興味を示さないみたいだね」

「ああ、お前達と会おう前みたいだ。美穂からの情報だと紫水もあんな感じらしい」

と優也の背中を見ながら会話する明久と虎丸。

「なんとかしてあげたいけど、さすがに二人の問題だね」

「いや、もしかしたら学年を巻き込む可能性もあるな。ん？優也が立ったな。どうする明久、追うか？」

「いや、やめておくよ」

ふと喉が渴いた優也はジュースを買いに行こうとした。

「・・・優也」

「翔子、か」

「・・・ちよつとついてきて」

「ああ・・・」

と場所を移動する二人。

「……どうして晶と別れたの？ 晶すごく寂しがって、あんな晶は見たくない」

「それがあいつの幸せの為だ」

すると、鋭い音が響く。それは翔子が優也を平手打ちした音だった。

「……あんな晶のどこが幸せなの？ 晶はいま明らかに不幸な目にあっている」

「仕方ないだろ！ 俺の周りには騒動がついてきて、そして巻き込まれる！ あんな強化合宿の時みたいに言いくるめられて、操られて、そんなのがあいつの幸せになるのかよ！」

優也が言った直後にチャイムが鳴る。

「この話は終わりだ。せめてあいつに俺以外の奴と幸せになれって言ってくれ……」

「……優也」

「はあ？ ババア長から呼び出し？」

「ああ、学園長がお前に頼みたい事があるらしい」

「失礼します」

と割って入ってきたのは友香だった。

「我々、Fクラスを除く二年全クラスがFクラスの学園の評判を落とし、進学のためにそれを排除する事を決めました。これはA B C D Eクラスの同意の下に行為であります。尚、開戦は午後からです」

「ちつ、本音は俺への復讐だろうが。おい！」

「ルールくらいは決めさせる。戦うのはFクラスから俺一人だ。だから教科の選択権は俺がもらう」

「ええ、いいわよ」

そつ言い立ち去る友香。そして教卓に立つ優也。

「優也、いいのか？」

「気にするな。これは、俺の戦いだ。とりあえずEクラスから攻める。だが上に上がるつもりはない」

「つまり、Eの次はBかCって事か」

「ああ。教科はEクラスには世界史Cクラスには日本史で挑む。そういえばババア長用事って何なんだ？」

「ああ、何やら腕輪についてらしい」

「なら戦力アップが期待出来るな。ちょっと行ってくる」

「ババア長、何か用か？ 大方新しい腕輪作ったからテストしろってか？」

「まあそうさね。ほらこれがマニュアルさね」

「ふむ。なかなかだな。召喚獣の仕様変更。ま、まだバリエーションは富んでないからまだ一種類だけか」

「試召戦争、頑張るさね」

「俺が騒動の原因なら、俺はさらに騒動の元凶になってやるさ」

## 第三十二問（前書き）

今回はブレイブルーネタが豊富です

## 第三十二問

「さて、行ってくる。虎丸、これ預けとく」

と陽春の腕輪を虎丸に預けてFクラスを出ていく優也。

「おかしいな」

ずっと考えていた雄二が呟く。

「おかしいって何が？」

雄二の呟きを聞いた明久が雄二に問う。

「一つはAクラスが同盟に参加していること。そしてもう一つは優也が単独で行動する事だ」

「別に二つ目はおかしくないんじゃない？」

「そうだな。じゃ言い方を変えよう。優也が誰の為でもない自分の為に戦っていることだ」

「自分の為に？」

「ああ、試召戦争は姫路の設備改善の為、清涼祭は姫路の転校を防ぐ為、そして強化合宿は明久の脅迫や俺の犯人捜し。どれも他人の理由がつきまとう。だからおかしいんだ」

「2つ目はわかったとして1つ目は？」

「そうだな。普通翔子や秀吉の姉が反対するはずだ。どうして・・・」

「・・・わかるわよ、その理由」

と割ってきたのは美波だった。

「まさか・・・」

「そう、晶よ。晶を使って強引に同盟を締結したに違いないわ」

「だが、前回で紫水は懲りたんじゃ・・・」

「残念だがそうらしい」

と口を開いたのは虎丸だった。

「昼休み美穂から連絡を受け取った。小山が宣戦布告に来る前だ。当然霧島や木下姉は反対、だが紫水は前線指揮と軍治を任されたらしい。そこに付け入られて締結。そんな流れらしい。そして優也はその事はわかってるみたいだな」

「そうか。結局あいつは人の為に動くんだな」

そう言い雄二は黒板、その奥のEクラスを見据えた。

「んじゃ戦死前の遺言でも聞くか？」

優也は既にEクラスの大半を戦死させているが、こっちも無傷とはいかず半分に減らされていた。

「くっ・・・行きなさい！」

「んじゃ腕輪のテスト開始するか。蒼の腕輪、起動！」

腕輪を起動すると優也の召喚獣が光り、光が収まると優也の召喚獣が黒い服に赤いジャケットを着た白髪頭の姿になり、二本あった剣は一本の剣になった。

「んじゃ行くぞ！」

剣を振るい敵を切る。体勢を低くして足を切った後本体を切る。気づけばEクラスは宏美以外全滅していた。そして優也の点数は回復していた。

「なるほど、点数の回復か。どこまで原作重視なんだよ。あれは金の腕輪なのか？使えないが」

実のところ優也は自分の召喚獣の元ネタを知っていて、アクションがわかっていた。声が似てる事で何回か物真似させられた経験もある。

「んじゃ、Eクラス殲滅、と」

宏美の召喚獣を鎌にした剣で何度も切り、そこから黒いオーラが纏い、その剣で召喚獣を貫く。今ここにEクラス戦は終了した。

「そんな実力で、俺の前に立つな！」

そう言い捨てて優也はEクラスを出る。次はどこを落とそうか、と考えながら。

### 第三十三問（前書き）

なんと2万PV突破です！こんな駄作をよんで頂きありがとうございました！

### 第三十三問

ふと考えて優也はBクラスを潰そうと考える。

（ただの金魚のフンだが現時点で開戦派最強部隊を倒せば下位クラスへの圧力にもなる）

そしてBクラスの扉を開く。

「お、こっちに来たのか。友香の元に行かなくていいのか？」

「悪いな、Cクラスは最後だ」

「Cクラスに同盟の援軍としてAクラスの紫水がいてもか？」

「ああ、だからこそ最後だ」

「お前、今度はあいつを助ける為に動いてるんだってな。わかってんのか？あいつを助けたところで待ってるのは騒動の元凶の彼女のレッテル。今のままの方が何倍もマシな気がするけどなあ？」

「んな事は既にわかってんだよ。だからあいつを救う。もつとも救いから遠い方法でな！蒼の腕輪、起動！」

「言ってる！いけ！」

二桁単位の人数が優也に襲い掛かる。

「遅え！そして甘え！」

まだ操作に慣れていないBクラスは優也にとっては正直力モだった。体勢を低くして相手の足を切り、転けたところを切り上げる。武器を跳ね上げ、切る。

Bクラスが半数を切った頃、優也の点数も半分を切っていた。

「ちっ！さすがはBクラス、点数だけは有り余ってやがるな・・・」

悪態をつきながらも徐々に数を減らす。そして少し時間が経過して

「あとは、てめえだけだ、根本！」

「ちっ！」

剣で根本の召喚獣を突き、横に振り回しその勢いで根本の召喚獣を吹き飛ばす。ホームランよろしく吹き飛んだ根本の召喚獣は途中でフィールドから離れ霧散した。

「さて、次はDクラスか。ち、やっぱりフィードバックはキツいな・・・」

蒼の腕輪はその性能故、観察処分者と同じ痛みのフィードバックを採用してある。だが物理干渉能力はない。

同時刻、Aクラス。

「・・・優子、状況は？」

「優也はE、Bクラスを殲滅した後、次はDクラスに向かうようです」

「・・・ここには来ないの？」

「来ませんよ」

と言ったのは美穂だった。

「さつき虎丸から連絡をもらったところ、譲崎君はこの騒動を予見していて、Aクラスも同盟に加わることも予想済みらしいです。もちろん、晶が同盟を締結させたことも・・・」

「つまりはこうだね。譲崎君はこの騒動を予見して、紫水さんが同盟を締結させたことも予想済みで、残りDクラスとCクラスさえ倒せばAクラスは戦う意味を失う。勝手に騒動は収まる。賢いやり方だ」

と言ったのは利光であった。

「だが、小山さんの言い分も一利ある。ここは、僕が見定めてくるよ」

「待つて久保君、それで優也がAクラスに敵意を持ったらどうするの？」

「大丈夫だよ木下さん、最初に彼にこの行動は僕の独断であると告げよう。そうすれば問題ないだろう？」

「・・・わかった。優也がDクラスに勝ったらよろしく」

と返事したのは翔子。

「わかったよ。そう伝えておこう」

と言い残しAクラスから去る利光だった。

### 第三十四問

「さてと、補習の覚悟はいいかてめえら」

とDクラスの扉を開け放ち言う優也。

「来ましたね。汚らしい豚野郎・行きなさい!」

と命令するが誰一人動かない。

「そりゃそうだよな。お前は強化合宿騒動の元凶だし、他の奴もとばつちりで補習は勘弁したいよな?」

コクコクと頷くDクラス生徒。

「というわけでこいつだけ始末したら他は勘弁してやる。試獣召喚! ！んで蒼の腕輪、起動!」

「くっ・・・やっぱり男は使えないゴミ野郎ですね・・・試獣召喚!」

「ハッ! 根本の方がまだまともだぜ」

美春の召喚獣の剣を弾き上げ、その内にめった切り。ほぼ秒殺とも取れるスピードにDクラス全体が驚愕した。

「馬鹿が、でしゃばるな!」

補習に連れて行かれる美春にそうはき捨てる。

「てか平賀、てめえもてめえだ。ここの代表は誰だ？お前だろ？あんな奴よりお前の方が代表に向いてる。そうだろ？」

と優也がDクラスに問い掛けるとさっきと同様、頷く。

「み、みんな・・・」

「よし、じゃラストに」

「いや、まだラストでは無いよ」

と入って来たのは・・・

「久保・・・利光」

「失礼するよDクラスのみんな。さて、僕がここに来た理由は、受験に響くという今回の騒動の表向きの大義名分だ。例えば方便だとしても事実だ。一年後の受験に響くんだよ。だから見極めさせてもらう！試験召喚！」

「ちっ！」

袴を着た利光の召喚獣が鎌を振るう。優也はそれを剣で防ぐが、優也はある事を忘れていた。そう

利光の召喚獣の鎌は、

二本である。

「な・・・んだと・・・くそ！」

急いで召喚獣を後退させるが追撃する利光の召喚獣。

「これで終わりだ！」

横から両サイドに鎌を振るう。が、それは二本の日本刀で受け止められた。

「まさか、腕輪を解除したのか！？」

「正解だ。考えてみれば相手が二本ならこつちも二本用意すればいい事だ。じゃ後がつつかえているんな。決めさせてもらう！」

「Aクラスを、なめるな！」

鎌を振るうがそれを右手の日本刀で受け止め、左手の日本刀で金の腕輪を使用、利光の召喚獣を切り裂いた。

「・・・なるほど、ね。わかった。僕はこの騒動を補習室で見届けろよ。あと、これは僕の独断だからAクラスに敵意は向けなくてくれ」

「ああ、わかった」

「それと、霧島さんから伝言だ。紫水さんを小山さんの手から救い出して欲しい、との事だ」

「・・・もともとから、そのつもりだ」

「正直いまの君をCクラスに行かすのは気が引けるけどね」

「大丈夫だ。あんなエスパーヒステリーくらい楽勝だ」

そこから昼休みに時間は戻る。

「そういえば、腕輪使用状態で能力使用は控えるんだよ」

「なんでだ？まだ実験中だから壊されちゃ困るってか？」

「屈辱的な言い方だが、そうさね。一個は完成してるけど、もう一個は使っんじゃないよ」

### 第三十五問

「これでラストだ。出てこいこの魔女が」

とCクラスの扉を開け言う優也。

「まさか全滅とはね。案外恭二も使い物にならなかったみたいね。じゃ、行つてらっしゃい」

「はい」

と前に出たのは

「晶・・・」

「何かな譲崎君」

「小山、てめえ・・・」

「この子が決めた道を邪魔しちゃいけないじゃない。じゃさっさと片付けて」

「試獣召喚！」

「試獣召喚！蒼の腕輪、起動！」

「じゃ行くよ譲崎君」

晶の召喚獣が剣で切り掛かるところを優也は剣を弾き上げる。

「初めから本気で行かせてもらう。ブレイブルー、起動！」

ブレイブルー。それは蒼の腕輪の金の腕輪の能力であり、元ネタの必殺技みたいなものである。対する晶も金の腕輪を使用し弓で攻撃する。優也は矢を切り、続いてきた拡散の矢を数発当たりながらも晶の召喚獣を切る。

「あら、幼なじみに容赦ないわね」

「部外者は黙ってる。いづれこうなる運命だ」

「よそ見はいけないよ譲崎君」

晶の召喚獣が弓を剣に戻し切り掛かるが、それを左手で受け止め右手の剣で切り飛ばす。

「さて」

優也の召喚獣が剣を腰にマウントして晶の召喚獣に突進する。

「目覚ましやがれ、この・・・馬鹿が！」

思い切り晶の召喚獣を殴り飛ばす優也の召喚獣。それにより晶の召喚獣は消え去った。

「つたく、目覚めたか？」

「ゆー君・・・？」

「ああ、あと数分、補習室で待ってる。後で迎えに行く」

「うん、わかったよ」

と鉄人とならんでCクラスを出ていく晶。

補習室にむかう晶であった。

（迎えに行く、かあ・・・えへへ）

と妄想に思いを馳せていると横をライオンのような髪が通り過ぎた感覚を得た。

「あら、もうボロボロね。あの子ごときでも役に立ったかしら？」

「てめえ・・・あいつをなんだと思ってやがる・・・」

「駒よ。いらなくなったら捨てるし、それ以上のリターンの為なら犠牲にするわ」

「この魔女が・・・てめえは・・・てめえだけは絶対許さねえ」

「この状況をどうにかできると思うの？」

友香を憎みはしろ、事実を言われ舌打ちする。  
が

「あるさ、そんな策ぐらい。いくらでも、な」

Ｃクラスに乱入してきたのは

「雄二！」

「お前ボロボロにやられてんな。じゃ、これだ」

雄二が優也にある物を投げ渡す。それは

「陽春の腕輪・・・」

「行くぜ、相棒？」

「ああ！同調召喚！」

優也の召喚獣に雄二の召喚獣が一体化する。武器は巨大な腕甲、足に甲冑を着て、大きな白のジャケツトを纏っていた。

点数は43+213。前者が優也で後者が雄二である。

「さてと、さつさと盛大に終わらすか」

「ああ、だな。待つてんだろ？」

「ああ、強化合宿が終わって数週間。俺は大きな忘れ物をしたからな。さつさと取りに行かねえとな」

フツと笑うと雄二は背中の壁に寄り掛かる。

「後は任せたぞ」

「任された」

優也の召喚獣がCクラスの召喚獣を殴り、リアットで吹き飛ばす。

「じゃ、ラストだ、本当の、な」

友香の召喚獣をいままでの鬱憤を晴らすが如く全力でぶん殴った。

### 第三十六問

「讓崎のやつは・・・」

そう鉄人がため息をつく。なにしろ補習室にはECBクラス全員、Dクラスから美春、Aクラスから利光と晶がいる状況で高橋先生を助っ人で呼んでも追いつかないくらいであった。

「さて、戦後対談といこうか？負け犬諸君」

各代表（Dクラスからは源二と美春）に言う優也。

「さっきババアに承認してもらった新しいルールだ。名付けて『代表交代制度』だ。同じ相手に二度負けたクラスは代表の采配が悪いという事で代表を交代する制度だ。わかりやすいだろ？これで一回目だ。さあ次の試召戦争が待ち遠しいな。今回の原因は雄二が対Aクラス対策として勝敗を着けなかったのもあるよな雄二？」

「俺の責任かよ！」

「お前がちゃんと翔子に勝ってたらこんな事は起こらなかっただろうに。あ、もう勝手に帰っていいぞ」

負け犬諸君・・・各代表に言う優也。そして帰る各代表。

「さて、忘れ物でも取りに行くか」

と優也が立ち上がる。

「次は落とすなよ？」

「んなこと、言われるまでもない」

そしてそのままFクラスの教室から出る優也だった。

「あ、ゆー君！」

と声を上げ優也に飛び掛かるように抱きつく晶。

「待たせたな」

「中学の頃の方がもっと待ったよ」

「じゃあ帰るか」

「うん」

その傍ら・・・。

『どうしますか須川会長？即刻異端審問会を開きませんか？』

『うーむ。その必要は、ない』

『なっ！？正気ですか会長！』

『譲崎は我らを守ってくれたのだぞ。自分だけが傷ついて、だが知人が傷つくのは許さず。だから我ら異端審問会は譲崎優也、紫水晶両名を公認カップルに任命する!』

『会長・・・!』

「あー疲れた」

二人で帰る道中、ポツリと優也が呟いた。

「だってゆー君二年生の半分以上をバツバツサと切ってくんだもん」

「それは科目選択があつてこそだしな・・・」

「それでもゆー君はすごいよ」

「ありがとよ。とまあ、今回でお前は放っておくと逆にダメだから俺のそばにいろよ?」

「わかったよゆー君」

「とまあ形上はそんなんだが」

そつと優也が晶を抱き締める。

「頼む。俺のそばにいてくれ」

「ゆー君・・・もう、ゆー君ったら、清涼祭のとき言ったでしょ?

ゆー君のためならどんな事でもするって。だから、頼まれなくてもそばにいるよ」

「晶・・・」

二人分の影はしばらく制止した後、夕日をバックに一つになった。

### 第三十六問（後書き）

はいオリジナル展開終了です。

さて次回の話は（サザエさんのノリ）

次回はGAU様の「バカと雲雀と召喚獣」とコラボいたします。私  
初コラボで不安ですが、暖かく見守ってくださいれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7180v/>

---

バカとテストと武想伝

2011年12月21日22時52分発行